
雨音は殺人の前奏曲

ほしの☆すばる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨音は殺人の前奏曲

【Nコード】

N5413E

【作者名】

ほしの☆すばる

【あらすじ】

青葉みちるは秀越高校バスケットボール部の二年生。夏のインターハイ終了後、孤島に強化合宿に来ていた。合宿最終日には毎年恒例の親睦会が行われるのだが、男子部キャプテンの斉藤貴俊が行方不明になる。必死に探すも、台風の接近に伴って捜索は中止された。そして、翌朝体育館裏の森で首を吊って死んでいる斉藤が発見された。斉藤の死は自殺として事件は終わりを見せたように思われたが……。

0..出会いは梅雨の真っ只中

少女は雨が大嫌いだった。

理由は単純だった。雨の日に良い思いをしたことがなかったからだ。大きな原因としてあげられるのは、生まれた時からずっといっしょだったケンタロウ（雑種犬オス）が散歩中に車にはねられて死んだことである。他にも小学校の入学式の帰りにはしゃぎすぎて転んで制服を泥だらけにして母親にたんまりと怒られたり、バレンタインデーのチョコを送り返されたり、高校受験日に交通渋滞に巻き込まれて危うく高校浪人になりそうになったりと、挙げればキリがなかった。

そして、今日は下校中にバスから降りた途端に振り始めた雨のせいで、バス停の近くにあるタバコ屋の狭い軒下で雨宿りを余儀なくさせられていた。バスケットボール部の練習を終え、疲れているところに追い討ちをかけるようにこの雨である。疲れも当社比1.5倍にふくれあがる。

「今朝はあんなにいい天気だったのに！」

少女は雨に濡れた短い髪をハンカチで拭きながら、恨めしそうにグレーの雨雲を見上げる。タバコの自動販売機のおかげで幾分かは明るいが、雨のせいでいつもより暗く感じる。

七月某日。梅雨明け宣言はまだされていない。

「もう県予選だからってテスト期間中にまでこんなに遅くまで練習することないのに。ああ、お腹空いたなあ」

少女はカバンの中から携帯電話を取り出して、自宅へとかける。三食昼寝付きという永久就職についた母親に迎えに来てもらうために。しかし、電話は寂しくコールし続けるだけで、誰も出てこない。「また父さんの悪口大会開いているな」

ご近所主婦三人組は夕食の支度を済ませ、旦那が戻ってくる合間に庭先でいつも自分の旦那の愚痴をこぼすのが日課になっている。今は雨が降っているから隣の家にでも上がりこんでいるのだろう。

少女はそんな母親達の姿を想像しながら、超特大のため息をつく。「あーあ。こんなことならキャプテンに傘を借りればよかったなあ」後悔先に立たず、である。

そこへ。

ばしゃばしゃと水溜りを弾かせて、一人の男性が少女のいるタバコ屋の軒下へと入ってくる。

「いやあ、やはり梅雨をバカにはいけませんね」

男は濡れたスーツをハンカチで拭きながらひとりごちている。

同じ境遇に陥っている男を、少女はマジマジと見つめる。年齢は二十代前半といったところだろうか。短く切りそろえた髪が清楚感のある顔立ちを引き立てている。

少女の中では九十五点という高得点がはじき出された。何よりも長身の少女より頭一つ分高いというのが一番のポイントだ。

「こんにちは。あなたも雨宿りですか？」

ふいに男がこちらを向いてきたので、あからさまに目線が合ってしまう。

「は、はい！」

少女は動揺してどもってしまおうが、漆黒の澄んだ双眸に見つめられて目がそらせずにいた。

「高校生、ですよね？」

「はい、二年生です」

「そうですか。うらやましいですね。ボクも高校生に戻りたいです」にっこりと微笑む男の顔を見て、少女は頬が紅潮していくのを感じた。

「おにーさんだってまだまだ若いじゃないですか」

「ハタチすぎればおぢさんの仲間入りですよ」

少女は男にすっかり魅了されていた。会話を続けるため何とか男

との接点を探そうとする。

「背、高いですね。何かスポーツとかやっているんですか？」

「いえ。これといって特定のスポーツはやっていません。仕事も忙しいですし」

「お仕事は何をしているんですか？」

「一応、サラリーマンでしょうか。雇われの身ですから」

少女と男との会話が盛り上がってきた頃、それを引き裂くような重低音をどこからともなく轟いてくる。

音の主は狭い裏路地からタイヤの音をききませながら現れた。

真っ赤なスポーツカーである。

スポーツカーはこちらに向かってくると、少女たちの前で急ブレーキをかけて停車する。

水しぶきが勢い良く少女たちに襲いかかる。

スポーツカーの窓が少しだけ開く。運転手の顔は見えない。

「社長自らお出迎えに来ていただけるのは光栄なのですが、もう少し歩行者に気を配る運転をしていたいただきたいものですね」

「何をのん気なこと言っているのよ！ 約束の時間はとくに過ぎているのよ！」

きんきん声でわめく女性の声が聞こえてくる。乗っている車とその声から女のイメージ図が浮かび上がる。気の強い胸デカ高飛車セレブに違いない。

「もう何でもいいから早く乗って！」

「あ、ちょっと待っていてください」

二人のやりとりを呆然と見ていた少女の元へ男がやってくる。

「セーラー服を台無しにしてしまいましたね。これ、クリーニング代です」

男は財布から千円札を取り出す。

「別にいいんです。どっちにしたって濡れていたし」

「いいえ、そういうわけにはいきません」

男は半ば強引に千円札を少女に押し付けると、急いでスポーツカ

ーに乗り込んだ。

「あ、あの……」

少女の声はスポーツカーの急発進する音にかき消される。スポーツカーは登場時を同じく重低音を轟かせて土砂降りの中を走り去っていった。

少女は手の中に残された千円札を見つめた。

「あれ？」

千円札といっしょに一枚の名刺があった。少女は音読する。

「『個人から企業まで、あらゆるエキスパートを用意して皆様からのお電話をお待ちしております。人材派遣会社000。ジェイムス・ボンド』……って。ふざけてんの？」

携帯電話の番号も書かれているが、少女の男への関心は断絶されてしまっていたので自分の携帯電話に登録する気にもなれなかった。

「容姿は良かったんだけどなあ」

少女は本日二度目の超特大ため息を吐き出すと、もらった千円札と名刺をスカートのポケットの中にしまい込む。

「やっぱり雨の日ってロクなことない！」

少女はガツカリと肩を落とす。そんな少女の気持ちに追い討ちをかけるように、雨足はどんどん強くなっていった。

もう二度と会うこともないだろうと思っていたジェイムス・ボンドと少女が再会するのは約一ヶ月後のことだった。

1..再会は嵐の予感(1)

「あーっ！」

あおば青葉みちるは大声を上げずにはいられなかった。

「あ、あなたはあの時の……」

みちるは長身をトレーニングウェアに身を包んだ、端正な顔立ちの男性を指差した。

男は爽やかに微笑みを返してきた。

「青葉、静かにしなさい」

しゅうえつ秀越高校女子バスケットボール部監督、おぎのきみえ荻野貴美枝は目尻のよつた双眸を吊り上げて、みちるを威圧する。四十一歳の男勝りな貴美枝は体力が有り余っており、未だに高校生相手に本気で試合をする熱血鬼監督である。

「すみません」

みちるは肩をすくめて小さく謝る。

「では、改めて紹介します。入院した夫、荻野に代わって、今日から合宿の間のみ男子部の監督をしていただくことになったジェイムス・ボンドさんです」

「皆さん、短い間ですが、よろしくお願いします」

ジェイムスは恭しく頭を下げた。

「はあ」

みちるはベッドの上で携帯ゲーム機のロールプレイングゲームをやりながら超特大のため息をついた。ゲーム画面ではパーティが低級モンスター二匹に遭遇して戦っている最中だった。

「つたく、どうして今頃になって痔の手術なんかするのよ」

みちるは剣士の技を選びながら、小声で毒ついた。

男子バスケットボール部監督の荻野忠通おぎのただみちが持病である痔を悪化させたのは、合宿前夜のことだったらしい。そして、合宿所へと向かうフェリー乗り場で、みちるはジェイムス・ボンドと再会したのは十日前ことだった。

「よりにもよってどうしてあの人なわけ？」

剣士の繰り出された華麗な技によってモンスターが一匹消滅する。

「明日でお別れなのねえ」

腰まである長い髪を二つに分けてくくっている少女が憂いの吐息をもらす。みちると同じく秀越高校二年女子バスケットボール部部員おがたりかこの緒方梨花子である。

「いつもは長く感じる合宿もあつという間だったよな」

髪を短く刈り上げた活発そうな少女は鼻息を荒くしてこの十日間を振り返っている。彼女も同じく秀越高校二年女子バスケットボール部部員しんぐうじひかるの神宮寺輝。

梨花子と輝はもう一つのベッドの上に座り込んでいる。

三人は秀越高校バスケットボール部専用の合宿所の女子寮の一室にいた。今はみちるの部屋になっている。六帖部屋にシングルベッドが二つとクローゼットだけの簡素なものだったが、一年生の時に比べればずいぶんとマシだった。一年生の時は同じ間取りにベッドが三つ並べられており、窮屈な思いをしたのを覚えている。逆に三年生になれば同じ間取りでベッドは一つ。つまり個室が与えられるということになる。ちなみに今年の二年生は奇数だったため、都合上みちるは二人部屋を一人で有意義に使っている。――はずだった。

「やっぱ彼女とかいんのかな？」

「あのルックスだったらあいたって不思議じゃないと思うけどなあ」

「だよな。何か年上キラって感じだし」

「そうかなあ。案外ロリコンでえ小学生くらいの女の子と仲良く手をつないで歩いていたりしてえ」

「いいや！ あのテの顔は絶対に年上キラーだ！」

「やっぱりロリコンよお」

「青葉は」

「みちるはあ」

抗弁していた輝と梨花子がみちるの方を向き、

「どう思う？ あの臨時でやってきたジェイムス監督のこと」

異口同音で聞いてくる。

みちるはこめかみをピクピクさせながら、ゲームに集中しようと思心かける。

一人の夜を有意義にゲームして楽しく過ごそうと思っていたみちるだったが、こうして毎晩輝と梨花子が押しかけてきてはジェイムスの話題で盛り上がっていた。

秀越高校バスケットボール部専用合宿所は本土から十キロメートルほど離れた小さな孤島にあった。数年前にバスケットボール部員のお金持ちな父親が子供のためにと個人所有のこの島を合宿所にと提供してくれたらしい。海と森に囲まれ携帯電話も圏外となる退屈なこの大自然の中で、輝たちにとってジェイムスの存在が唯一の娯楽といっても過言ではなかった。だが、みちるにとっては迷惑以外の何物でもなかった。

ゲームの中では、パーティが古城の迷路に迷い込み、中級クラスのモンスターが三匹出現する。

「青葉、アタシたちの話を聞いてんのか？」

返事をしないみちるに痺れを切らして、輝がみちるのベッドに侵入してくる。みちるはベッドの端へと追いやられる。

輝は真っ黒に日に焼けた肌と男勝りな口調のおかげで男に間違われることも多々あるが、本人は全く気にしていない。逆にそれを自分のチャームポイントだと言い切ってしまうのだから大した自信家である。バスケットボールの試合が始まると、輝は『オフエンスの鬼』と化す。その口調と同様に常に攻撃的なプレイをする。ポジシヨンはパワーフォワード。

「おい、青葉」

みちるは無視してゲームを進めていく。モンスターを倒し、古城の迷路をやっと脱出した瞬間。

ぷちっ。

携帯ゲーム機の液晶画面が一瞬にして真っ暗になる。どうやら充電が切れたようである。

「あーっ！」

みちるは絶望の悲鳴を上げた。

輝と梨花子のペースに惑わされて、充電をするのをすっかり忘れていた。しかも、今夜は一度もセーブしていない。

みちるは枕に顔を埋めた。

「だーっ、またあの迷路に行かなきゃいけないなんてー！」

「アタシたちの話を無視した報いだ」

嘆き悲しむみちるから輝は枕を奪い取ると、梨花子にチェストパスする。

「もう、輝たらあ。そんなきつく投げないでよねえ」

「あ、悪い悪い」

梨花子は昼間の練習で左手首をひねってしまいテーピングしていた。

「でも、みちるはいいわよねえ。ジェイムス監督とはお知り合いだったみたいだし」

梨花子が受け取った枕を今度はみちるに向かってショルダーパスする。おっとりした口調の中には明らかに皮肉が込められている。梨花子の夢は玉の輿に乗ることらしい。貧乏人とは交際する気にはなれないと言っては、告白してくる男どもを奈落の底へと突き落とす。色白で華奢な梨花子はアスリートに見られないらしく、試合の時は相手の意表をついて華麗なパスを披露してくれる。ポジションはポイントガード。みちるたちは『コートの小悪魔』と呼んでいる。

ちなみに、みちるのポジションはシューティングガード。『3ポイントの魔女』などと言われている。

「知り合いつて程じゃないって、何度も説明したでしょう！」

みちるは梨花子がシヨルダーパスした枕を受け取る。輝と梨花子の非難の視線を浴びながら、今夜で十回目となるジェイムスとの出会いの経緯を話す。

約一カ月前の、あの雨宿りの出来事を事細かく。

「名刺、ホントに捨てちゃったのか？」

と、輝。まだ疑いの眼差しを向けている。

「しつこいわね。会社の名刺だったから、すぐに捨てたって言うてるでしょう！」

「でも、携帯電話の番号も書いてあったんだろう？」

「もったいなあい。私だったら絶対に捨てたりしないのに」

「青葉もマヌケだよな。あの後、電話してりゃあ万が一にもあのジェイムス監督の彼女になれたかも」

輝は言葉を切って、みちるの顔をマジマジと見つめ、

「……ありえないか、そんな奇跡みたいなこと」

嘲笑した。

「そうよねえ。私を差し置いてみちるにカレシができるわけないわよねえ」

梨花子が止めを刺す。

「何言ってるの。この三人の中ではあたしが一番まともじゃない」

二人の毒舌に負けずと、みちるは発育途中の胸を張る。

「あんたさ、鏡見たことある？」

輝は嘆息すると、右手をかざす。すると、梨花子が『おしゃれ七つ道具ポーチ』からコンパクトミラーを取り出し、輝の右手に乗せる。輝はコンパクトミラーを開くと、みちるに顔を見させようとする。

「ほら、やっぱりね」

みちるは鏡に映る自分の顔を見て、その美貌を再認識する。

「一度、眼科でちゃんと診てもらった方がいいぞ」

「あ、私いい眼科知っているからあ、帰ったら教えてあげるねえ」

「いやーね、女の嫉妬って」

みちるは、ほーほっほと右手を口に当ててお上品(?)笑いをしてみせる。

輝と梨花子とは出身中学校は違うため、秀越高校バスケットボール部に入部してからの付き合いになる。性格は三者三様だが、バスケットボールが好きという共通点がこの三人を気軽に憎まれ口が叩けるような仲に進展させていた。夏のインターハイでは三人そろって初めてスターティングメンバーに選ばれて、嬉しさのあまり抱き合って号泣したくらいである。

「青葉、合宿が終わるまでにはちゃんとジェイムス監督の携帯番号とメールアドレスを聞いておけよ」

輝は詰め寄ってくる。

「どうしてあたしが？」

「だってえ、みちるが一番ジェイムス監督に話しかけやすいじゃないのお」

梨花子はそう言いながら『おしゃれ七つ道具ポーチ』の中からヘアピンを取り出すと、自分の前髪を留める。

「知りたいなら自分で聞きにいきばいいでしょう」

「それができないから頼んでんだろう。ほら、アタシってシャイだから、男の人を目の前にするとなんかしゃべれなくなっちゃうんだ」

「どの辺がシャイなわけ？」

「なあ、アタシたち親友だろう？」

輝は慢心の笑顔を作って、みちるの肩をもみ始める。

「都合のいい時だけそう言うんだから」

「そんなこと言うなよ。な、緒方」

「そうそう。私だって手首を捻挫してなかったらあ、特訓で疲れたみちるの体をもみほぐしてあげるんだからあ」

「はいはい。あたしは優しい親友を二人も持てて幸せ者です」

みちるは皮肉ると、超特大のため息をもらした。
合宿に来てからは毎晩こんなやりとりを繰り返し、のんびりとさせてもらえないみちるだった。

1..再会は嵐の予感(2)

「しかし、今日の練習メニューはハードだったよな」

輝は早々にみちるの肩もみを止めて、ベッドの上にうつぶせで寝転がる。

みちるは輝の右足を軽く持ち上げてマッサージを始める。

「そうだね。二学期が始まったら何人が退部届けを提出してくるかとやら」

毎年のことだが、この合宿後には決まって一年生の中に数人の退部者が出る。それはこの合宿の厳しさを物語っていた。二年生になってレギュラーになった者でも厳しい練習に耐え切れずに退部してしまうくらいである。その地獄の練習に耐えられた者だけが秀越高校バスケットボール部に必要とされる。だからこそ、秀越高校バスケットボール部は過去に何度も全国優勝を成し遂げ、全国でも名を知られるほどの有名校になったのだ。

みちるは苦笑しながら、輝のふくらはぎを力強くもむ。

「痛いって、青葉!」

「神宮寺さん、かなりはってますねー」

「当たり前だろう! 足腰の鍛錬だって砂場を三百回ダッシュだぞ。その後は合宿所までフルマラソン。貴美枝監督は絶対Sだ!」

「あ、それ言ってるかもお」

同意する梨花子。

「まあまあ、疲れた体はあたしがもみほぐしてあげるから」

みちるはニコニコしながら輝に馬乗りになり、足全体を容赦なくもみほぐす。その度に輝が断末魔の悲鳴を上げる。みちるにとってその悲鳴はある意味心地よく、ストレスを解消してくれた。

「お、緒方も後でやってもらえよな」

輝は梨花子にも同じ苦痛を味あわせようと、みちるのマッサージ

を勧める。

「私はパスう」

梨花子は『おしゃれ七つ道具ポーチ』の中から美容液マスクを取り出し、顔に乗せる。

「あれぐらいでバテるような体してないからあ」

そう答える梨花子に、みちると輝が絶句した。梨花子のあのか細い体のどこにそんなスタミナがあるのだろうか。もしかしてバスケットボール部で最強なのは梨花子ではないだろうかと思ってしまう今日この頃だった。

「それに今日は新親睦会があるからあ」

大きな口を開けてしゃべれない梨花子が小さく口ごもる。

寝食所が男子部と別のため合宿中にほとんど交流はなく、合宿最終日に行われる親睦会だけが部員たちの心の支えになっていた。

「何ーっ？」

輝が素っ頓狂な声を出して起き上がる。不意をつかれてみちるはバランスを崩してベッドから転げ落ちる。

「ちょっと、輝！ 急に起き上がらないでよ！」

「このアタシがそんな大事なイベントを忘れるとは不覚だ！」

輝は拳を強く握り締めて雄叫びを上げていた。みちるの言葉など全く耳に入っていない様子である。

「おい、緒方。アタシにもそのマスクくれよ」

「残念でしたあ。これが最後の一枚だったのお」

「じゃあ、それをくれよ」

「いやあよお。輝じゃあ今更やったって手遅れでしょお。いつもお肌の手入れしていないんだからあ。それに輝のチャームポイントは日に焼けた小麦色の肌なんだしい」

梨花子のごもつともな意見に、さすがの輝も反論できなかった。

いろんな意味で梨花子がやっぱり最強だね。

みちるは胸中でひとりごちた。

「あ、そういえば親睦会の準備はやらなくていいのかな？」

「毎年三年生が準備するんだってえ。だから、私たちは呼ばれるまで自室待機よお」

「ふーん」

「何だよ、青葉。あんまり嬉しそうじゃないな」

輝は梨花子の『おしゃれ七つ道具ポーチ』の中から勝手にヘアスプレーを取り出し、髪型を整え始める。

みちるは今の男子部員たちと交流を深めようという気になれなかった。

「両監督が秀越高校のOBだってことは知っているよな？ 何でも合宿中のイベントがきっかけで付き合うようになって結婚して幸せを手に入れたらしくてさ、毎年恒例のイベントになったんだよな」
「恋する気持ちがあるスケのプレイに不思議なパワーを与えるって思っているみたいだし」

「いや、それは違う気がするけど」

みちるは小声で否定した。

「青葉、あんたはこのイベントの重大さがわかっていないみたいだな。いいか？ 普段あまり交流がない男子部の奴らとゆるりお話ができるんだぞ！ しかも、今夜は無礼講で夜更かしもOKのお許しが出ているんだ！ このチャンスを活かさずして、いつカレシをGETするってんだ！」

輝が鼻の穴を膨らませて力説する。

バスケットボール部内は基本的に恋愛は自由になっている。もちろん部員以外との恋愛も認められている。しかし、クラブ活動をしていると、どうしても相手とすれ違いが生じ、長続きしないのが現状である。そのせいか、同じバスケットボール部内で異性を求めてしまう傾向にあった。

「はいはい、去年もそんなこと言っていました」

すっかりカレシGETモードに突入している輝に、みちるの諦念は強くなっていくばかりだった。

「でもお、斎藤キャプテンはもう無理よねえ」

梨花子言っているのは、男子部キャプテンの齋藤貴俊さいとうたかしのことだった。バスケットボールの実力が買われてスカウトされて秀越高校に入学してきたという、誰もが認める実力の持ち主である。容姿は目立って美形というわけではないが、社長子息でもあり将来を有望されているため、女子部員からの人気は絶大だった。

ちなみに輝と梨花子の去年のターゲットは齋藤だったが、見事に粉碎された。

「相手がうちのキャプテンじゃオール整形したって太刀打ちできないもん」

ガツカリと肩を落とす輝。

「それってウワサだけでしょ？」

「面と向かって『俺は真木くんが好きだから、君たちとは付き合えない』って言われたんだぞ。それにあの二人の雰囲気を見てればわかるだろう。つたく、青葉はまだまだお子様だな」

「お子様の輝にそんなこと言われるとは思わなかった」

輝に鼻で笑われ、負けずと言い返すみちる。

「でも、齋藤キャプテンに真木キャプテンはもったいない気がするんだけど」

女子部キャプテンである真木清香まきひさかはバスケットボールが上手なだけではなく眉目秀丽であり、みちるたちの憧れの的だった。ポジションはセンター。女子部では一番長身で、みちるたちは『バスケットコートに舞い降りた女神』と呼んでいる。

「何を言ってるんだよ。うちの部はキャプテンになれば好条件で有名な体育大学からお誘いがくるんだぞ。だから齋藤キャプテンの将来はもう決まったようなもんだろう。ってことは、真木キャプテンの未来もバラ色決定なんだよ」

「そこに愛はないわけ？」

「愛なんてえ後からいくらでも生まれてくるわよお。でも、お金はそうはいかないものお」

みちるの突っ込みに、梨花子がシビアな見解を述べる。

「そういうこと！ アタシも斎藤キャプテンみたいなカレシをGETするぞ」

輝は両手をしっかり握りしめて、どこか虚ろな瞳で銀河系の彼方を見上げていた。

みちるは頭を抱えた。

「ということはあ、輝のターゲットは三条くんねえ。彼、次期キャプテンってウワサされているもんねえ」

「ぐっ」

梨花子のするどい指摘に、輝が言葉を詰まらせる。
さんじょうみつひこ

三条光彦はみちるたちと同じ二年生だが、父親が代議士とかでそれを鼻にかけているところがみちるは嫌いだった。

「まさか、緒方も？」

「だってえ、他にお金持ちがいないんだもおん」

梨花子はマスクを下からゆっくりとはがしていくと、顔に残った美容液を手でやさしくなじませていく。

「緒方には竹ノ内みたいなのがいいんじゃないか？」

「ええ？ やだあ。あの子、三条くんのパシリみたいだし、将来お金持ちになるように思えないんだもおん」

「顔は三条よりいいだろうが」

「だったら、輝が竹ノ内くんにすればいいじゃない」

「いやだ！ アタシ、軟弱者は大嫌いだ！」

みちるはしばらく傍観者となって、輝と梨花子のやり取りを見ていた。そして、ここにはいない竹ノ内直人たけのうちのなおとに心底同情した。

「青葉、あんたは誰なの？」

輝の矛先がみちるに向いた。どうやら梨花子と話していても決着はつかないと思ったのだろう。

「あたし？ 誰って言われても……」

「まさか、青葉も三条狙いか？」

輝の双眸がギラリと殺気を放ったように見えた。
「安心してよ。あたし、三条くんに興味ないから」

「ホントか？」

輝は猜疑心いっぱいの眼差しを向けてくる。

「悪いけど、今の男子部にあたしのタイプはいないから」

今度は輝と梨花子がそろって冷たい視線を投げつけてくる。

「な、何よ、その目は？」

「青葉、まずは己を知っているという言葉を知っているか？ そんなことだと去年の二の舞になるぞ」

確かに去年の親睦会でみちるたちは男子部員に声すらかけてもらえなかった。去年は慣れない地獄の練習のおかげで全身筋肉痛となり、そんな体に鞭打って引きずりながら参加した。あんな姿では声をかけてもらえないのは当然だろう。

輝は諦観のこもった表情を浮かべると、みちるの顔を凝視する。

「これが最後のチャンスかもしれないんだぞ」

「あのね、あたしにだって選ぶ権利ぐらいあるでしょうが！」

「ない！」

「なあいい！」

輝と梨花子がマッハで否定する。さっきまでいがみ合っていたというのに、こういう時だけ二人は意気投合する。やはり三人という奇数はむずかしいのだろうか。誰かもう一人を仲間に引きずり込もうかと真剣に思うみちるだった。

「もしかしてえ、私たちが三条くん争奪戦をやっている時にい、みちるはジェイムス監督とうまくやろうなんて思ってるのかあ」

梨花子はみちるのベッドに移動してくると、上目遣いに顔を近付けてくる。男ならばこの色香に間違いなく参ってしまうだろう。実際、梨花子にカレシがないのは不思議なくらいだ。もっとも性格に難ありと言ってしまうばそれまでだが。

「またそうやって何でも結びつけないでよ。あたしはジェイムス監督にも興味ないから」

「みちるはまだ天道キャプテンのことが忘れられないのかなあ」

「青葉、あの熱血青春バスケ男が好きだったのか？」

「そ、そんなことあるわけないじゃん！」

みちるは梨花子のするどい指摘に動揺を見せながら、輝の言葉を否定する。

男子部前キャプテンの天道透てんどうとおるはみちると同じ中学校出身で、初恋の人だった。卒業後は県外の体育大学に進学している。

「だったらあ、私が三条くんとうまくいっても文句は言わないわよねえ」

梨花子は三条GETを想定してしゃべる。

それが輝にも伝わったのだろう。

「アタシにもな」

すかさず強調してきた。

「はいはい。燃えるのはいいけど、血の雨だけは降らさないでね」

みちるは本日三度目の超特大ため息を吐き出した。

「青葉さん？」

ドアをノックする音の後に、清香が顔をのぞかせる。バスケットボールのプレイ中はいつも一つに束ねている黒髪も今はほどかれていて、肩に当たる毛先がゆるくウェーブしている。

「あら、神宮寺さんと緒方さんもいたの？ 親睦会が始まるから。

そろそろ体育館へ行ってくれるかしら？」

「はい！」

待っていましたといわんばかりに、笑顔で答える輝と梨花子。清香は返事を確認すると、他の部員の部屋へ向かった。

「よっしゃー！ 気合い入れまくるぞ！」

両拳を高々と振り上げて気合いを入れる輝の横で、梨花子は髪を結び直している。

みちるは窓の外に目を向ける。まだ十九時前だというのに、空はグレーの雲に覆われてどんよりと暗かった。

「いやな天気。雨、降らなきゃいいのにね」

みちるは誰にというわけでもなく呟いた。

2..親睦会は曇り模様（1）

親睦会は体育館で行われた。

夕食はすでに済ませているので、並べられたテーブルの上にはスナック菓子とジュースが用意されているだけの簡素なものではあったが、部員たちはそれぞれの思惑を胸に秘めて心をときめかせていた。

喜美枝の短いあいさつが終わると、輝と梨花子はお目当ての三条の元へ駆け寄っていく。気が付けば、みちる以外の二年生の女子部員は皆三条の所へ集まっている。三条の周囲は女子部員であふれていた。三年生はすでにカップルができあがっており、清香はやはり斎藤といっしょにいた。一年生はというと、昼間の地獄の練習にグロッキーになっていて親睦会に参加する元気は残っていないらしい。これもまた恒例である。去年は例外もいたが。

みちるは誰もいないテーブル席に腰掛け、オレンジジュースの入った紙コップを片手にスナック菓子をつまんだ。

「あんな男のどこがいいんだか」

三条を取り囲む輝たちを見ながら、みちるは毒づいた。

三条からバスケットボールの情熱を感じたことがなかった。地位と名声を手に入れるためだけにバスケットボール部に入部したように思えた。上背がある分、体格的にはバスケットボール向きだし、プレイも下手ではない。それなりの実力もある。ただ人を蔑むような態度が氣にくわなかった。

みちるはオレンジジュースを一気に飲み干すと、おかわりを注ぐ。「お一人ですか？」

背後から掛けられた声に、みちるは一瞬ドキッとしてオレンジジュースをこぼしそうになる。振り向くと、紙コップを片手に持った

トレーニングウェア姿のジェイムスが立っていた。しかも、まぶしいくらいのさわやか笑顔を振りまきながら。

「ええ、まあ」

みちるは目をそらして返事すると席を立ち、足早に壁際へと移動する。

ジェイムスと話をしているところを輝たちに見られたら後で何を言われるかわからないので、距離をおいておく方が賢明といえよう。だが、みちるのそんな気持ちなど知るはずもないジェイムスはこちらへと歩み寄ってくる。

こっちに来ないでよ！

みちるは横目でジェイムスを追いながら、胸中で叫んだ。

「話し相手がいないのでどうしようかと困っていたのですが、あなたがいてくださって助かりました。青葉みちるさん」

ジェイムスの声が斜め後ろ四十五度の角度から鮮明に聞こえてくる。

みちるは輝たちの様子をうかがう。どうやら三条争奪戦に白熱していて、こっちにまで気が回らないようである。

みちるは安堵して型の力を抜くと、ジェイムスに向き直る。

「話し相手なら他にもいっぱいいるんじゃないですか、ジェイムス監督」

「よく見てください。荻野さんは入院しているご主人に電話を掛けに行ってしまったし、女子部員の皆さんは男子部員、特に三条くんの所に集結しています」

言われてみればその通りだった。カップル、三条グループ、後は女子部員に相手にされない哀れな男子部員諸君、としっかりとグループ分けされていた。さすがにブルーモードに入っている男子部員たちとはお話したくない。となると、一人でいたみちるの元へ必然的にやってくるしかないということになる。唯一一人でいたみちるもジェイムスに取られてしまい、男子部員たちのブルーモードにますます拍車がかかっていた。

みちるが呆れた顔をしていると、ジェイムスが同意を求めてくる。
「わかっていただけましたか？」

「な、何となくね」

みちるは壁に自分の背中を預けると、ジェイムスもその横に背中を預ける。二人の身長差は20センチほど。みちるの身長は171センチ。ということは、ジェイムスは190センチを越えているということになる。

「でも、ジェイムス監督なら女子が放っておかないでしょう？」

「どうも彼女がいると思われるらしく、誰も声を掛けてくれないのです」

「いないの？」

みちるは信じられないといった様子で目を丸くする。

「変ですか？ やはり彼女はいませんと」

「まあ別にいいんじゃない。っていうか、前に派手な車で迎えにきた人は？」

「あの人は社長ですから」

ジェイムスは微笑する。

「そういえば、そんな風に呼んでたっけ。そっか」

無意味に安堵する自分に気付いて、みちるは頬が熱くなるのを感じた。

「それにしても驚きました。あなたが秀越高校バスケットボール部の部員でしたとは」

「あたしだって驚いたわよ。あの時のおにーさんが男子部の臨時監督として来るなんて」

「お客様のニーズに応えるのがわが社のモットーですので」

みちるはジェイムスからもらった名刺を思い出した。

「人材派遣会社って、こんなこともするの？」

「これはうちの会社だけだと思いますよ」

「ふーん」

この合宿所で再会を果たしてから、こうしてまともにジェイムス

と会話するのは初めてだった。ジェイムスは年下のみちるに対して敬語を使っている。おそらく癖なのだろう。しかし、これでは監督としての威厳はまったく感じられない。こんな調子で男子部員たちはちゃんと従ってくれたのだろうか。バスケットボールの実力は斎藤と互角のように見えたが。

他人事ながら少し心配になったみちるだった。

「そういえば、気になっていたんだけど。その名前って本名なの？」
「もちろんですよ」

みちるはジェイムスの顔を凝視した。

黒髪、黒目の極一般的な日本人の顔立ちをしている。どう見ても異国の血が混じっているようには思えなかった。

その視線に気付いたジェイムスは柔和な顔で小さく笑い声をもらす。

「よく勘違いされますが、ボクは純粋な日本人ですよ」

「じゃあ、その名前は……？」

「本当はちゃんと漢字があるのですよ。ただそれですと読みにくいと思ひまして、便宜上カタカナにしているのです」

ジェイムスはズボンのポケットの中からシステム手帳を取り出して、メモ欄に何かを書き始める。そして、そのページを千切ると、みちるに渡す。

梵杜時瑛武梳

と、書かれている。

「まさか、これ？」

「そうです。漢字で書くようになります」
確かに普通では読めない漢字である。

「どうしてまたこんな名前を……」

「ボクの母がスパイ映画の大ファンでして、梵杜家に嫁いだ時から男の子が生まれたら絶対この名前をつけようと決めていたみたいで

す」

「兄弟はいるの？」

「残念ながら一人っ子です」

ジェイムスは破顔で答える。

みちるはそれを聞いて安心する。もし兄弟がいたらどんな名前になっただろうか。ましてや男の子ではなく女の子が生まれていたら。そんなことを考えながら、みちるは青葉家に生まれたことを神に感謝した。もし自分の名前がそんな理由で付けられていたらグレていたかもしれない。

だが、ジェイムスはまったく気にしていない様子だった。

名前の事情さえ知れば何ら普通の人と変わりはない。バスケットボールのプレイ中もけっこうサマになっていたし、彼女もいない。となれば、このチャンスを黙って見逃すのも惜しい。しかし、輝たちに『興味がない宣言』をしておいてぬけがけするのも気が引ける。みちるの中で激しい葛藤が始まる。

「でも、またお会いできて嬉しいです。電話をくださらないから諦めていたのですが」

何の前ぶれもなく唐突に言ってくるジェイムスの言葉に、みちるは口に含まれたオレンジジュースを吐き出しそうになる。それを何とか飲み込んでゴホゴホと咳き込む。

「大丈夫ですか？」

ジェイムスは心配そうにみちるの背中をさすってくれる。

「そ、それってどういう意味で言っているの？」

「どういう意味かと言いますと」

「青葉！」

「みちるう！」

ジェイムスの言葉は輝と梨花子のすがるような叫び声にさえぎられた。二人の声を聞いて硬直するみちる。

輝が右から、梨花子が左から、みちるに抱きついてくる。思わず紙コップを落としそうになり、ジェイムスが気を利かせて紙コップ

を受け取ってくれる。

「ど、どうしたのよ、二人とも」

声が明らかに動揺していた。輝と梨花子は涙でうるんだ双眸をこちらに向けてくる。

みちるは二人に責め立てられるのを覚悟した。だが、二人の口から発せられたのは別の言葉だった。

「聞いてくれよ、青葉。三条の奴、ひどいこと言うんだぜ」

『三条の奴』と言った時点で、みちるは次の言葉が予想できた。

「『お前のような下品な女には用はない』なんて言ったんだっ!」

「私なんか『男に媚を売る色きちがい』って言われたのよお!」

輝と梨花子は口々に三条の悪言を言い始める。隣に立っているジエームスは眼中にないといった感じた。そして、当の三条はまだ女子部員に囲まれている。

「自分を何様だと思ってるんだよ!」

「ホントホント。お金持ち以外は何の取り柄もないのに!」

数分前まで三条への熱いラブコールを送っていた人間とは思えない豹変ぶりである。

「くやしーいっ!」

業腹な二人は声をそろえてみちるに泣きついた。

「だから言ったのに。輝や梨花子ならもっといい男が見つかるから

……元気出してよ」

みちるは泣きじゃくる二人の頭をやさしくなでた。なぐさめるのはいつもみちるの役目となっている。

「男なんてもういない!」

と、輝と梨花子。

2..親睦会は曇り模様（2）

「やっぱ男は年上に限るよな」

「そうよねえ。同級生は子供っぽく見えちゃうものねえ」

ジェイムスの両脇に寄り添うように立っている輝と梨花子を、みちるは半眼で睨みつけた。

「あんたたち、男なんてもういらなんて言っただけでなかった？」

「誰がそんなこと言ったんだよ？」

輝がジェイムスの右腕に自分の腕を回す。

「そうよお。みちるったら耳鼻科にも行った方がいいんじゃない？」

梨花子がジェイムスの左腕に自分の腕をからめる。

みちるはこめかみに怒りマークを何個も浮かび上がらせながら、叫び散らすのを何とか堪えた。

「まったく、懲りないんだから」

仕方なく、小声で毒付く。

輝たちがジェイムスと仲良く会話をしているのを尻目に、みちるはオレンジジュースのおかわりを注ぎに行く。

「あれ？」

みちるは清香と斎藤が体育館から出て行くのを見かける。そんな二人を見送りながら、妙な違和感を覚えた。どこかと聞かれたら答えに困るのだが。

大して気にも留めず、空になった紙コップに三杯目のオレンジジュースを注ぐ。

「遅いんだよ、お前は！」

体育館中にその声は響き渡った。

みちるは声の主を見た。みちるだけではない。その場にいた全員

が一斉に彼を見た。

三条光彦を。

三条は足元で尻餅をついて座り込んでいる男子部員——同じく二年生の竹ノ内直人に憤慨している。竹ノ内はバスケットボール部内でも一番矮小で、その体格通りに気も小さく、いつも三条に下僕扱いされていた。

竹ノ内のTシャツは濡れていた。よく見ると、床に紙コップが転がっている。おそらくは三条に飲み物を持ってこいと命じられて、持っていたが遅いと腹を立てられてオレンジジュースの入った紙コップを投げつけられたといったところだろう。

三条は貴美枝と両キャプテンがいらないのをいいことにやりたい放題だった。

すでに三条に頭の上がない三年生は何も言わない。ただ黙って事の成り行きを見ているだけである。二年生や女子部員はなおさらのことだった。こんな時、天道がいれば三条に怒りの鉄拳でも食らわしてくれたのだろうか、今は三条にそんなことをする者などバスケットボール部には存在しない。

「サイテー！ もう我慢できない！」

みちるは黙っていることができなかった。竹ノ内を助けるためというよりは、輝と梨花子への暴言を非難するためだが。

そう思っって一步を踏み出した時。

「大丈夫ですか、竹之内くん」

ジェイムスが竹ノ内に手を貸していた。しかし、竹ノ内はジェイムスの手を断って自力で立ち上がると、ペコリと頭を下げて体育館から出ていった。

「放っておけばいいんだよ、あんな役立たず」

三条が罵声を飛ばす。

「三条くん、それがチームメイトに対して言う言葉なのですか？ 竹ノ内くんに謝るべきではないのですか？」

「臨時がえらそうなことってんじゃねえよ。けっ。あのバカのせ

いですっかり白けちまったぜ。面白くねえ！」

三条は反省する様子も見せず、体育館を出ていく。その三条の後を追っていく女子部員たち。

みちるには彼女たちが金に目がくらんだ亡者のように見えた。

「すぐおい、ジェイムス監督！ 正義の味方みたあい」

梨花子が感激してジェイムスの左腕に抱きついた。

「ホント、男の中の男って感じだったぜ！」

輝も負けずとジェイムスの右腕に抱きつく。

ジェイムスの背後では輝と梨花子が顔を合わせバチバチと火花を散らしていた。

容姿こそ似ていないが、みちるにはジェイムスが天道と重なって見えた。

結局、親睦会はすぐに終了し、三条に追って男子寮に向かった女子部員たちは貴美枝に見つかりこっそりとしぼられた。

「あーあー、三条のおかげでせっかくの親睦会がおじゃんになっちゃったな」

輝がベッドの上で大の字に寝転んでばやく。

「そうよねえ。せっかくジェイムス監督と親密になれるチャンスだったのにい」

梨花子はベッドの上で柔軟体操をしている。

「ちよっとあんたたち！ 寝る時くらいは自分の部屋に戻りなさいよね」

ベッドを占領されたみちるは、輝と梨花子を部屋から追い出そうとする。と、二人の冷たい視線が突き刺さる。

「何よ、その目は？」

「裏切り者！ アタシたちが三条んとこに行ってる間にちゃっかりジェイムス監督とよろしくやってたくせに」

「そうそう。ずいぶんと仲良さそうに話していたわよねえ」

輝と梨花子が恨めしそうな顔を向けてくる。見ていないと思っていたが、どうやらしつかりと眼界に入れていたらしい。

「ご、誤解だって。あたしたちは別にそんなんじゃない」

「あ・た・し・た・ちい？」

ハモる輝と梨花子。なだめるつもりが逆効果になり、二人の嫉妬の炎がメラメラと燃え出す。

「アタシらよりちょっと早く知り合ったからって、ぬけがけは許さないからな！」

「そんなことしたら私たちの友情も終わりだからねえ」

「わかったわよ」

みちるは渋々応じる。今はこの場を鎮めて、二人を部屋から追い出すことが先決だ。

「じゃあ、これにサインしろ」

輝が一枚の紙片を差し出す。黙読してみると、それはジェイムスに対してぬけがけ行為をしないという誓約書だった。すでに輝と梨花子はサイン済である。

「いつの間にそんなの作ったの？」

「いいから早く書けよ」

「はいはい」

みちるは輝からボールペンを受け取ると、自分の名前を書いた。後から思えば、こんなものにサインするのではなかったと自責の念にかられるみちるだった。

「よし、これで安心して眠れるな」

輝はまた大の字になって寝転がる。

「だから、自分の部屋に戻って言っているでしょう！」

「いいじゃん、今更」

みちるは嘆息する。もう何を言っても無駄だと諦念したみちるは、自分が輝たちの部屋に移動するという妙案を思いつく。

部屋を出ようとして、戸口で貴美枝と鉢合わせする。

「ここに真木が来ていない？」

「いいえ、来ていませんけど」

「そう」

貴美枝の神妙な顔つきに、みちるは不安を感じた。

「何かあったんですか？」

「真木と斎藤がいなくなったのよ」

3..失踪は台風と共に(1)

斎藤と真木がいらないことに気付いた貴美枝とジェイムスは合宿所内を探していたらしいが、見つけることができずに部員総出で捜索することになった。

台風の接近も伴い、捜索は急を要した。

女子部員は寮や体育館、グラウンド近辺の森。男子部員は海岸や森といった島全体。

捜索隊は女子部員三人と男子部員一人の四人一組に分けられた。みちるは輝と梨花子。そして、ジェイムスのチームになった。はしやぐ輝と梨花子とは裏腹に、みちるの中の不安はどんどん大きくなっていく。

「それではボクたちは女子寮の北側を探してみましよう」

チームごとに捜索する場所を分担し、一時間後に一度女子寮の食堂に集まることを決めて、みちるたちはジェイムスを筆頭に北側の森に向かった。

各自懐中電灯を手にとって、清香と斎藤の名を呼ぶ。

「よく人数分の懐中電灯なんてあったわよねえ」

感心したように梨花子が言う。

「ほら、ここって自家発電だから万が一のために懐中電灯やロウソクとかは大量に用意してあるんだって」

「さすがは青葉さん。よくご存知ですね」

みちるの言葉にジェイムスが賛美の声を上げる。

「そういうのだけは詳しいんだよな、青葉は」

輝が皮肉る。

みちるはわざとらしく咳払いしてみせると、清香の名を呼んだ。静まりきった森の中からは夜の住人である梟が返事をしてくれる

くらいだった。できるだけ自然を破壊することなく合宿所は建設されたため、島内には野鳥などが多く生息している。付け加えると、ヘビのような類の生物も多い。先日、海岸から合宿所までのマラソン途中で青大将に遭遇したばかりである。

みちるは足元を照らしながら、慎重に歩いていく。昼間はともかく夜間はそういった類の生物とは遭遇したくない。もっとも向こうも同じ意見だろうが。

夜の湿った空気が全身にまとわりつく。風の威力も徐々に強くなってきたような気がして、空を仰ぐ。雲の流れが速い。時折、暗雲の隙間から満月が顔をのぞかせる。

バキッ。

みちるが落ちていた小枝を踏ん付けた。自分で踏んだものの、さすがのみちるも驚愕し、体内温度が二℃ほど上昇した気がした。

「きゃあ、ジェイムス監督こわあい！」

このチャンスを待っていたかのように、梨花子が白々しいセリフをはいてジェイムスに抱きつく。

それを見たみちるは輝の方にライトを向ける。輝はやられたと言わんばかりに悔しそうに拳を握りしめて歯噛みしていた。

「大丈夫ですよ、緒方さん」

そんな梨花子の思惑を知ってか知らぬか、ジェイムスは抱きついた梨花子をなだめながらゆっくりと離す。

「あ、ジェイムス監督。あっちの方で物音が！」

今度は輝が棒読みなセリフで、ジェイムスの手を引っ張っていく。「あーん、ジェイムス監督う。一人にしないでえ」

と、梨花子が追っていく。

清香と斎藤を探すという当初の目的が完全に消去されているようだった。

「まったくのん気なんだから」

先に行く三人を見ながら、みちるは超特大のため息をついた。

一時間経っても斎藤たちを見つけることができなかったみちるたちは女子寮へと戻った。

食堂にいたのは一年生と二年生のチームだけで、三年生チームはまだ一組も戻ってきていなかった。男子部員チームもだ。

「荻野さん、どうでしたか？」

貴美枝は黙って首を横に振った。

「三年生がまだ戻っていないようですが」

「ええ、まだ……」

貴美枝が重苦しい口調で答えた。

一同が沈黙して、壁に掛けられている時計を見た。約束の一時間はとっくに過ぎている。

カチカチという時計の音だけが食堂内に響いた。

「何かヤバイ展開になってんじゃないか？」

口火を切ったのは輝だった。その言葉に全員が不安を露にする。こういう時は誰もが悪い方へ物事を考えてしまう。

「大丈夫よ。先輩たちはキャプテンを探すのに必死になって時間を忘れているのよ。もう少ししたらキャプテンを見つけて戻ってくるって」

「そうです。青葉さんの言うとおりですよ」

みちるの言葉は全員を安堵させるまでには至らなかったが、ジェイムスの助言に輝と梨花子がムキになって同意すると、全員の表情が少しだけ和らいだ気がした。

しかし、それから二十分経っても誰も戻ってはこなかった。全員は力なくイスに重い体を預けた。時計の針はすでに九時を回っている。

貴美枝が思い立ったように急に立ち上がる。

「私は男子の様子を見てきますから、ボンドさんはここをよろしく願います」

「ボクが行ってきますので、荻野さんはここにいてください」

「いいえ。男の人が少しでも多い方がこの子たちも安心するでしょうから」

そう言って、貴美枝は食堂を出た。

「ここってえ、幽霊島だったかしらあ？」

梨花子が小声で呟く。気のせいか皆と違って瞳が輝いている。みちるは梨花子がオカルト好きだったことを思い出した。

「こんな時にそういう冗談は言わないで！」

みちるも小声で言う。皆にいらぬ心配と動揺を与えなくなかったからである。

――と。

ふいに室内の照明が消え、真っ暗になった。

「きゃあああっ！」

何人かの悲鳴が飛び交う。

「っ！」

誰かがみちるに抱きついてきた。驚愕のあまり体が硬直してしまふが、その声を聞いて脱力する。

「きゃあ、ジェイムス監督怖い！」

輝だった。ジェイムスに抱きつくつもりが暗闇で目測を誤ってしまったのだろう。

こんな状況まで利用するとは、恋する乙女心は侮れない。

「残念でした。ジェイムス監督はあっち」

みちるは持っていた懐中電灯のライトを、ジェイムスがいるはずの方向に向けた。

梨花子がジェイムスにしっかりと抱きついていた。それを見た輝は恨めしそうに呻いて、みちるから懐中電灯を取り上げると梨花子の顔をピンポイントで照らしつける。

「きゃあ、まぶしいい」

梨花子はそう言って、ジェイムスの胸に顔をうずめる。それを見て輝は激昂し、ついには強引に梨花子をジェイムスから引き離しかかる。

「おい緒方、いつまで抱きついてんだよ！」

「もおう輝ったら乱暴なことしないでよお」

「懐中電灯があればもう怖くないだろう！」

「そうねえ、ありがとおう。ほら、輝の顔もよく見えるよお」

梨花子は輝にから押し付けられた懐中電灯のライトを輝の顔に向けた。

この二人は危機感というものを把握していないようである。そして、女の友情ほど儚く壊れやすいものはないと痛感させられたみちるだった。

「ねえ、他の子たちはあ？」

梨花子が懐中電灯で周囲の様子をうかがう。

みちるは照らし出されたテーブルの上にあった懐中電灯を手にとり、食堂内を照らしてみる。恐怖のあまり、声を失って床にしゃがみ込んでいるのかもしれない。そう思ってライトを下に向けてみるが、スポットライトを浴びたのは無造作に転がっている懐中電灯数個だけだった。

「ビックリして逃げたんじゃないか？」

と、輝。

「それはないと思う。こういう時って普通は体が硬直して動けなくなるはず。しかも、こんな暗闇の中で。それに逃げるにしたって、懐中電灯を落としていくなんて考えられない。男子だったのに」

約二名の例外もいるが、みちるはあえて言わなかった。

「きつと合宿所内の電気を点けたまましておいたのでブレーカーが落ちたのかもしれませんが」

「そうかな？　こんなこと初めて」

みちるはジェイムスの言葉に納得がいかなかった。今まで全室エアコンを使ってもブレーカーが落ちたことなど一度もなかった。

考えられることとしては、誰かが作為的にブレーカーを落としたと
いうことぐらいだ。

「とにかく電気が点かないと話にならないよ。発電所に行ってみま
しょう」

3..失踪は台風と共に(2)

発電所は女子寮からグラウンドを挟んで南東の位置にあった。

みちるたちはお互いの存在を確認しながら、ゆっくりと歩いている。

鉄柵に囲まれた小さな発電所。懐中電灯のライトに照らされた鉄扉はぞんざいに開け放たれていた。普段は貴美枝が鍵を掛けていて部員たちは入れないようにしているはずだった。

「貴美枝監督のいたずらじゃないのお？」

少し残念そうに、梨花子。

「つたく、こんな時に性質が悪いぜ」

「きつと男子寮へ行くフリをしてここに来てブレーカーを落としてえ、私たちをビックリさせようとしたのねえ」

輝と梨花子は哄笑する。

しかし、みちるはますます納得がいかなかった。現状から考えて貴美枝がそんなことをするメリットがどこにもなかったからである。皆が必死になって清香たちを探している最中に、面白がつて合宿所内の照明を全部消すような愚考を、あの鬼監督の貴美枝がするとは思えなかった。

みちるが黙考している間に、眼界がいきなり明るくなる。ジェイムスがブレーカーを上げたのだらう。グラウンドの照明のまぶしさに、みちるは思わず目を細めた。

「これで一安心ですね」

ジェイムスが発電所から出てくる。

「でもお、変よねえ。例えいたずらだったとしてもいきなり真っ暗になったら男子たちが駆けつけてきてもいいのにねえ」

「キャプテンたちを探しに行って海岸の方まで行ってるからすぐには戻ってこれないんじゃないか」

梨花子が首を傾げると、輝が答えた。

「もしこれが本当に貴美枝監督のいたずらだったとして、貴美枝監督はどこに行ったんだと思う？」

「どこって……」

「そんなのわかんないわよお」

輝も梨花子もみちるの問いに困惑する。

「男子寮に行ってみますか？」

ジェイムスの意見に、みちるは無言でうなずいた。

みちるたちにとって初めて入る男子寮だった。内装は女子寮と同じ構造になっている。男子特有の汗臭いに臭いはなく逆にコロンの芳香が放たれていたが、大したときめきも感じられなかった。

一階の食堂にはやはり誰もいなかった。

「貴美枝監督、バツが悪くてどっかに隠れてんじゃないか？」

輝がそう言った時。

「きゃあーっ！」

悲鳴が聞こえてきた。

「貴美枝監督？」

一同が声をそろえる。

「でも、どこから？」

「声が響いていました。おそらく大浴場からでしょう」

言うと同時にジェイムスは走り出していた。みちるたちも慌てて後を追う。

大浴場は一階の西側にあった。ロウカを走り抜けて大浴場のドアを開ける。脱衣所には誰もいないこと確認して、浴室に入る。

しかし、ここにも誰もいない。

「ホントにここなの？」

みちるは怪訝な顔をジェイムスに向ける。

「間違いありません。荻野さんはここに……」

ジェイムスは浴槽の方へと歩いていき、言葉を切った。その顔は明らかに驚愕していた。

みちるはジェイムスの視線を追って、浴槽を見た。

浴槽のお湯が真っ赤に染まっていた。

「うっ」

みちるは思わず口を押さえた。

「もしかしてえ、血い？」

梨花子は震える指先で浴槽を指す。

「まさか……貴美枝監督の……」

輝は続きを言うことができなかったのだろう。それっきり口を閉じてしまった。

おそらくここにいる全員が思っても口にできなかった言葉。

貴美枝が殺された。

だが、遺体はない。浴槽の血が貴美枝も血だという確証もない今、貴美枝が殺されたと断言するのはまだ早い。

「き、きつとまた貴美枝監督のいたずらなのよ。真木キャプテンたちをグルになってえ、私たちをからかっているのよ」

梨花子は無理矢理明るく振舞う。さすがのオカルト好きもこういう状況には慣れていないらしく、声が上ずっている。

しかし、すでにいたずらという一言では片付けられない状況になってきていた。

——と。

また照明が消えて眼界が闇に包まれる。

「きゃあああああっ！」

暗闇の浴室に梨花子と輝の悲鳴が響き渡る。

みちるはハーフパンツのポケットの中に押し込んでいた懐中電灯を取り出して辺りを照らす。

梨花子と輝が抱き合って泣いていた。よほど怖かったのだろう。

今回はジェイムスに抱きつくという余裕はなかったらしい。しかも、二人の懐中電灯は食堂に置いてきたままだ。

「皆さん、大丈夫ですか？」

ジェイムスが懐中電灯のライトをこちらに向けてくる。

「とりあえず、ね」

みちるは梨花子と輝に寄り添う。

みちるとジェイムスが足元を照らしながら、全員が一旦食堂に戻る。梨花子と輝は各自の懐中電灯を手にして、灯りをとす。

「これじゃ発電所に行ってもまた同じことの繰り返しになるわね」
「そのようですね」

みちるの意見にジェイムスが同意する。

「何が起こってんだ？ どうしてアタシたちだけがこんな目に遭うんだよ？」

輝は激昂するが、その声音は弱々しかった。

「落ち着いてよ、輝」

「落ち着けるわけないだろう！ なあ、緒方」

「う、うん」

梨花子が体をビクツと震わせて小さくうなづく。すっかり怯えてしまっていて口数が減ってきている。

「あ……」

四つの灯りのうちの一つが消えていく。それはジェイムスの懐中電灯だった。

「どうやら電池切れのようですね」

「でも、まだ三つあるんだから平気よ」

「ですが、他の懐中電灯の電池もいつ切れるかわかりませんので、予備があつた方がいいでしょう」

ジェイムスの言うことも一理あつた。夜が明けるまでにはまだ時間がある。それまで電池がもつとも限らない。しかし、怯える梨花子たちのことを考えると、移動は避けたかった。

「ボクの部屋に充電式の懐中電灯がありますので、それを取ってき

ます。皆さんはここで待っててください」

「どうしてそんなものを持っているわけ？」

「この合宿所は自家発電と聞きましたので、万が一に備えていろいろ持ってきているのです」

「ふーん」

みちるはジェイムスの泰然たる態度に感心した。

「でも、一人で動くのは危険だから皆で行きましょう」

寮が木造でなくてよかったと、みちるはつくづく思った。歩くたびにギィギィと床を軋ませていては恐怖心も倍増するところだ。だが、足音を消して歩くということは不可能であって、結局はキュッキュツというスニーカーの靴底が床にすれる音が暗闇の男子寮に木霊して恐怖心を煽り立てていた。

輝ははぐれないようにしっかりとみちるの左手を握りしめていた。きつく握りしめた指先はしっとりと汗ばんでいる。

梨花子は気丈にも一人で歩いている。それでも恐怖を紛らわせるために小声で歌を口ずさんでいる。

階段を上がりきると、細長いロウカが続いた。暗闇に閉ざされていて先はまったく見えない。

しばらく歩くと、ジェイムスが足を止めた。

「ここです」

ジェイムスは部屋のドアを開けて中に入る。そして、みちるも中に入ろうとした。

が。

「っ！」

暗闇の中から両腕が伸びてきて、みちるは突き飛ばされた。

みちるはバランスを崩して、手をつないでいた輝といっしょに倒れる。

「みちるう！ 輝う！」

梨花子が慌てて駆け寄る。

バタンっ！

乱暴にドアが閉められた。

「監督っ？」

みちるは立ち上がると、ジェイムスの部屋のドアを引いた。しかし、鍵を掛けられてしまったのか、ドアは開かない。

「監督！ 監督、返事をして！」

みちるはドアを力任せに叩きながら、ジェイムスと呼んだ。

「誰ですか、あなたは？」

中からジェイムスの声が聞こえてきた。明らかにジェイムス以外の人間がいる。

「監督、誰がいるの？ 何があったの？」

「逃げてください！」

「ジェイムス監督？」

「ボクにかまわず、早く！ うわぁーっ！」

中で乱闘しているのか、騒々しい物音が聞こえてくる。しかし、ジェイムスの悲鳴を最後に何事もなかったかのように静まり返る。

「走るよ！」

みちるは梨花子の背中を押し、未だに座り込んでいる輝の手を引っ張ると叫んだ。

わけがわからなかった。ただ逃げなければいけないということだけはわかる。

みちるは震える足に鞭打って走り出す。輝の手を握ったままなので走りにくかった。足がもつれてしまいそうになり、何度も階段から転げ落ちそうになる。

そして、何とか食堂まで戻り、みちるが振り返った時。

そこに梨花子と輝の姿はなかった。

4..新キャプテンは雨の洗礼を受ける(1)

突風が窓ガラスを忙しく叩き、台風の接近をアピールしていた。

「いつ離しちゃったんだろう……」

みちるは輝を握っていた左手をじっと見つめた。

梨花子はみちるより足が速かった。先に行くことはあっても遅れることはないと思っていた。しかし、考えてみればあの状況下でいつも通りに疾走できるはずがなかった。

なぜ確認しようとしなかったのだろうか。

みちるは自責の念に駆られた。

だが、今はそんなことを悔やんでいても仕方がない。輝と梨花子を助けに行かなければならない。

みちるは冷静になって今までのことを思い出す。

まず、清香と斎藤が失踪し、全員で搜索することになった。

時間になっても戻ってこない三年生と男子部員たち。

停電の後、消えた部員たち。

貴美枝の悲鳴と、血に染まった男子寮の浴槽。

ジェイムスが部屋に隠れていた見えない敵に襲われた。

そして、輝と梨花子がいなくなった。

「ダメ！ 何もわかんない！」

考えがうまくまとまらない。

「こんな時は考えるよりもまず行動よ！」

みちるは天道の座右の銘を思い出して、強硬手段を選んだ。

調理場に行き、包丁を手にする。正体のわからない敵を相手にするにはこれくらいの武器は必要である。

みちるは懐中電灯の灯りを消すと、ハーフパンツのポケットの中に押し込む。足音もなるべく消すためにスニーカーを脱ぎ捨てる。

そして、包丁を右手に携えて、手すりを持ちながらゆっくりと階段を上がっていく。

静寂の寮内では、今にも破裂しそうな心臓の鼓動だけが聞こえてくる気がした。できることならこのまま逃げ出したい。しかし、ここは海に囲まれた孤島。例え、合宿所内から逃げ出せたとしても、島から出ることはできない。しかも、台風が接近中というオプションまでついている。斎藤たちを探しに行った男子部員たちが無事なら話は別だが。

こんな時、天道先輩がいてくれたら……。

思わず他力本願な弱音を吐いてしまう。

ダメだ！ みちる、いない人のこと考えてどうするの！

みちるは頬を叩いて叱咤する。

追われる恐怖よりも自分から追っていく恐怖を選んだのだ。今更後戻りはできない。

クーラーが切れた寮内は、先ほどよりも暑さを増していた。緊張も伴って、汗が全身から噴き出る。

みちるは頬を伝う汗をTシャツの裾でぬぐった。

二階に上がった時、暗雲の隙間から恥ずかしがり屋な満月が顔をのぞかせる。真っ黒だったロウカが月明かりに照らされる。

みちるはジェイムスの部屋の前に立ち、ごくりと唾を飲み込んだ。震える左手をドアノブに伸ばした。

刹那。

ドアが勢い良く開いた。

ぱんっ！

ぱーんっ！

何かが頭に飛んできた。

「っ！」

みちるは声にならない悲鳴を上げた。と同時に、寮内の照明が一斉に点灯する。

夜目になっていたみちるはあまりのまぶしさに目を閉じ、包丁をぶんぶん振り回した。

しばらくして何も起こらないことを確認したみちるは、ゆっくりと目を開けた。眼界には赤、青、黄色といった色とりどりの縮れた紙テープが散乱していた。

「……クラッカー？」

みちるは包丁を置いて、それを手に取る。

「青葉っ！」

「みちるう！」

輝と梨花子がジェイムスの部屋から飛び出してきて抱きついてくる。

「へ？」

みちるは間の抜けた声をもらした。周囲をよく見てみれば、空になった特大クラッカーを手になっているジェイムスがいた。いや、彼だけではない。貴美枝と女子部員全員。そして、失踪したはずの清香もいた。

「あ、あの……キャプテン、これって？」

「ごめんね、青葉さん。怖い思いをさせてしまっただけ」

清香が胸の前で両手を合わせると、いたずらっぽく笑う。

「実は、これって次のキャプテンを決めるためのテストだったのよ」「はい？」

「いかなる状況でも冷静に判断し、仲間を思いやる心がなければキャプテンになる資格はないわ。あなたは充分すぎるくらいよ」

清香はみちるの足元に置いてある包丁を見て微笑する。

「じゃあ、今までのことは……」

「全部、お芝居。ジェイムス監督のおかげでずいぶんとリアルになっちゃったけど。だから、皆を見てきていて、これ以上耐えられないと判断した子たちは早めに外してきたのよ」

清香がジェイムスを見る。停電の後に女子部員たちが消えたのはそういう理由があったらしい。

「楽しませていただきましたよ」

と、ジェイムスがウィンクする。

「あ……ははは。そうだったんだ」

みちるは全身の力が萎えていくのを感じ、その場に座り込む。

今思えば、血に染まった浴槽からは血生臭さがなかった。あれだけの大量の血が流れされていたというのに。冷静に考えればわからないことではなかった。

やられたと、みちるは思った。

「男子の方も終わったみたいだから、全員体育館に集まりなさい」
貴美枝の言葉で一同が移動を始める。

みちるは輝と梨花子の肩を借りて、体育館へと向かった。

「何、これ？」

体育館に入ったみちるは、またしても啞然とさせられた。

『新キャプテン襲名パーティ』と書かれた横断幕が掲げられていた。

どうやらみちるたちが男子寮で悪戦苦闘している間に、準備が進められていたらしい。と言っても、親睦会の延長戦みたいなものだが。

みちるは『新キャプテン』と書かれた席札のテーブル席に座らされる。隣の席には三条が座っている。

みちるにとっては信じがたい事実だった。ましてや、男子部のテストが女子部と同じであればなおさらである。あの三条に部員を思いやる心があるとは思えなかったからだ。

「というわけで、新しいキャプテンの未来を祝して。乾杯！」

斉藤がオレンジジュースの入った紙コップを掲げる。

「かんぱーい！」

全員が乾杯する。と同時に二年生の女子部員達はまたしても三条の元へと駆け寄ってくる。みちるは邪魔者扱いで端へとどんどん追いやられる。

輝と梨花子はジェイムスを挟んですでにバトルモードに突入している。

みちるはうんざりとした顔で、竹ノ内が一人で座っているテーブル席に避難する。二人の間に無言が続いたが、耐え切れなくなったみちるが口火を切った。

「ねえ、竹ノ内くん。男子部のテストも女子部と同じオカルトチックだったの？」

「はい」

覇気のない返事が返ってくる。

「あの三条くんがねえ。ま、あたしもキャプテンって器じゃないんだけどね」

みちるは女子部員たちももてはやされている三条を一瞥する。

「そうになると、竹ノ内くんはますますパシリとかやらされちゃうんじゃない？ 嫌なことは嫌ってハッキリと断った方がいいよ」

「いいんです。ボクは何の取り柄もない人間ですから。必要としてくれるのなら……」

「竹ノ内くん、三条くんよりバスケ上手じゃない」

「そんなことないです！ ボクが三条くんより上手いはずがないです！」

いつもはおとなしい竹ノ内が激昂した。

「竹ノ内くん？」

「あ、ごめんなさい。ボク……」

「もう少し自分に自信を持った方がいいよ」

「……………」

竹ノ内はそれっきり口を閉じてしまう。みちるもそれ以上はあえ

て言おうとは思わなかった。

「おい、竹ノ内！ ジュース持ってこい！」

三条が竹ノ内を呼ぶ。竹ノ内はテーブルにあるオレンジジュースのペットボトルを持って、三条のテーブル席に走った。

みちるは無言で竹ノ内の背中を見送った。

「キャプテンになったというのに浮かない顔をしていますね」

ジェイムスが空になったみちるの紙コップにオレンジジュースのおかわりを注ぎに来る。

「まだ実感がわかないっていうか……、あたしなんかそんな大役が務まるかどうか不安で」

「そんなことはありませんよ、青葉さんは」

みちるはジェイムスの次の言葉に期待した。
しかし。

「ジェイムス監督、アタシもおかわり！」

「私もお願ひします！」

輝と梨花子が紙コップ片手に割り込んでくる。二人からおびたらしい殺意のオーラが感じるのは気のせいだと思いたい。

「はい、どうぞ」

ジェイムスは柔和な顔で、輝と梨花子の紙コップにもオレンジジュースを注ぐ。

ここはホストクラブか？

と、みちるは胸中で突っ込む。

「主役のキャプテンがそんな隅っこに座っていていいのか？」

「そうよお。主役席に戻らなきゃあ」

どうにかしてジェイムスとみちるを引き離そうと、輝と梨花子は画策してくる。

「あんなどこに戻れるわけないでしょ！ ……えっ？」

みちるは三条を指差して、啞然とする。自分が座っていた席に清香が座っていたからである。しかも、三条と楽しそうに会話している。斉藤は別のテーブル席で男子部員たちといっしょにいる。

さすがの輝と梨花子も啞然としていた。

「ねえ、真木キャプテンってえ斉藤キャプテンと付き合っているんじゃないの？」

「はずだったんだけどなあ」

輝は首を傾げる。

「三条と話してるからって、斉藤キャプテンと別れたって決めつけるのは早いんじゃない？」

「それもそうよねえ」

「真木キャプテンが三条みたいな奴と付き合うわけないよな」

みちるたちが否定説を必死で語っている最中、清香は三条といっしよに体育館を出て行く。

みちるたちの否定説はあっさりと覆された。

「うそだ」

「真木キャプテンだけは他の女子とは違うってえ信じてたのにい」

輝と梨花子はかなりショックを受けていた。

清香は選手としても女性としてもあこがれの存在だった。純愛を貫いてくれる聖母のように感じていたのは、みちるたちの勝手な思い込みでしかなかったのだろうか。

ショックを受けていたのはみちるたちだけではなかった。斉藤は清香たちが出て行くのを見ると、不快な表情を露にしていた。

「ジェイムス監督、ボク疲れたので先に部屋に戻っていいでしょうか？」

竹ノ内だった。

「大丈夫ですか？ 顔色があまり良くないようですが」

「大丈夫です。部屋で休めば治りますから」

そう言って、竹ノ内は体育館を出た。

「そりゃあんな怖い思いさせられれば疲れるわよね」

みちるは竹ノ内を見送りながら、ジェイムスに対して皮肉を言う。

「あれは荻野さんから何かいい案はないかと頼まれました。毎年のことで、荻野さんも頭を痛めているそうですよ。ちなみに去年は右

脳テストだったそうです」

「そういえば、去年の合宿初日にそんなテストしたような。で、その後すぐに真木先輩がキャプテンに選ばれて……」

みちるは頭を抱えた。

「こんなことでキャプテンを決めるなんて」

「ですから、今年は少し志向を凝らしてみようかと」

「限度ってものがあるでしょ！」

「青葉さんならあれぐらいはクリアできると思ったものですから」
ジェイムスの解顔に、みちるは不覚にも怒りを忘れてときめいてしまう。

「第一印象で感じた通り、あなたは慧眼の持ち主です」

「ジェイムス監督……」

みちるの胸はきゅんきゅんと鳴りまくった。こんな気持ちは天道が卒業してからはご無沙汰な感覚だった。できることならこのまま鳴らし続けていたいと思った。

しかし、幸せな時間は長く続かない。

「はい、ときめきタイム終了！」

シヨックから立ち直った輝が瞬時にみちるとジェイムスの間に割って入ってくる。輝の声で梨花子も我に戻る。

みちるは小さく舌打ちする。

「あ、梨花子。テーピングがほどけてるよ」

みちるは白々しく会話の矛先を変える。

「ホントだわあ」

キャプテン選びテストの際に、バタバタしてほどけてしまったのだろう。

「私、取り替えてくるねえ。輝う、みちるう」

梨花子は『ぬけがけ禁止』としっかり目で訴えてから女子寮に戻っていく。

「一人戦線離脱」

輝が小声で呟いたのをみちるは聞き逃さなかった。

輝は早速ジェイムスの横に腰掛けて。

「ジェイムス監督はどんな女の子がタイプ？　ボーイッシュな子はどうか？」

いきなり直球勝負に入った。

みちるも固唾を吞んでジェイムスの回答を待つ。

「そうですね。好きになった人がボーイッシュな人であればそういうことになりますね」

みちるはガクッと肩を落とす。その場しのぎの曖昧な答えのように思えたからだ。

「っていうことは、アタシにもチャンスはあるってわけだ」

しかし、輝は燃えていた。

「神宮寺輝」

貴美枝が輝を呼びにやってくる。

「はい！」

「自宅から電話が掛かっているから、私の部屋まで来なさい」

「はい！」

輝は返事をする、恨めしそうな顔でみちるを見つめた。

「まったく、こんな時間に何の用だよ？」

輝は予想外の展開にぶつぶつと文句を言いながら、体育館を出て行く。もちろん『ぬけがけ禁止』ビームを双眸から放ちながら。

「神宮寺さんも緒方さんもかわいらしい女性ですね」

「ホントにそう思っているの？」

「はい。青葉さんもかわいいですよ」

悪意のないジェイムスの笑顔は、ある意味で剣呑だ。この屈託のない笑顔に何人の女性が恋の奴隷と化したことだろうか。

「そ、そういうことはあまり言わない方がいいと思うけど」

「思ったことを口にするのはよくありませんか？」

「まあ時と場合によっては……」

みちるはときめく心を抑えながら、平常心を保とうとする。

「そうですか。以後気を付けます。ありがとうございます」

「別にお礼を言うほどのことでもないと思うけど」

「ボクは世間知らずだとよく社長に怒られます。だから、青葉さんの助言はとても嬉しいのです」

その言葉を聞いた時、みちるは女社長に同情した。と同時に、ジエームスがとても幼く感じた。

「神宮寺輝、只今戻ってまいりました!」

息を切らして戻ってきた輝は、オレンジジュースを一気に飲み干した。

「またお父さんから?」

「そうなんだよ。携帯電話が通じないから電話はできないって言うてんのに、寮の電話にわざわざか掛けてきやがって。『台風が接近しているから外に出るな』だってさ。ホント、迷惑な親父だぜ。今何時だと思っただよ。もう十時半だぜ。普段ならとくに消灯時間だ」

「それだけ神宮寺さんのことがかわいくて心配なのですよ」

と、ジエームス。言ったそばからこれである。

「やだな、ジエームス監督。かわいいだなんて、そんなホントのこと言わなくても」

輝はすっかり舞い上がっていた。

それからしばらくして梨花子も戻ってくる。

「遅かったね、梨花子。あれ、服着替えた?」

「だってえ、汗かいてベトベトしちゃって気持ち悪かったんだもん」

そう言った梨花子の髪型もキレイに結い直されていた。気合い入りまくりといった感じだ。

「斉藤、いる?」

貴美枝が今度は斉藤を呼びにくる。

「斉藤キャプテンなら、さっきすれ違いましたあ。たぶん男子寮に帰ったんじゃないですかあ」

梨花子が答えると、貴美枝が男子寮に向かった。

みちるは妙な胸騒ぎを感じた。

4..新キャプテンは雨の洗礼を受ける(2)

十分ほどして、貴美枝が再びやってきた。男子寮に斉藤がいないということだった。

「また？」

みちるはうんざりとした顔でジェイムスを見る。

「今回、ボクは何も知りませんよ」

「ボンドさんの言うとおりです。今回はテストではありません」
貴美枝の言葉に体育館内に緊張が走る。

「悪いけど、探してくれる？」

またしても捜索隊が結成された。しかし、台風の影響もあり、女子部員は寮で待機することとなった。

「斉藤キャプテン、もしかしたらあ真木キャプテンの部屋にいるんじゃないあい？」

「そんなわけないだろう」

「わからないわよお。斉藤キャプテンだって真木キャプテンが他の男子と仲良くしていたら焦るんじゃないあい？」

「斉藤キャプテンはそんな男じゃないぜ！」

「みちるはあ」

「青葉は」

抗弁していた梨花子と輝は、

「どう思う？ 斉藤キャプテンのこと」

異口同音でみちるに聞いてくる。

「ありえないと思うけど、真木キャプテンにも斉藤キャプテンがいなくなったことは伝えておいた方がいいかもね」

みちるは嘆息して答えた。

清香は三条と出て行ったきり、体育館には戻っていない。あれからかなりの時間が経過にしているので、自室に戻っているとは思う

のだが。

みちるたちは清香の部屋を訪れると、清香が顔を出す。

斉藤がいなくなったことを告げる。

「真木キャプテンは斉藤キャプテンがどこに行ったか知りませんか？」

「知らないわ。ごめんなさい。私、気分がすぐれないから休ませてもらっていいかしら？」

清香はそう答えると、静かにドアを閉めた。

清香の声音に動揺があった。やはり斉藤と別れて三条と付き合うことに少なからずも罪悪感があるのではないだろうか。

「あれ、外に誰かいるぞ？」

二階のロウカから窓の外を見ていた輝が声を上げる。その声につられて、梨花子も窓の外を覗く。

「男の人みたあい。もしかしたらあ斉藤キャプテンかもお」

「ホントに？」

みちるも覗くが、すでに人影はなかった。

「どこにいたの？」

「あそこ」

輝が女子寮の裏側にある森を指差す。

みちるたちはその森に向かった。

突風にあおられて木々たちがざわめいている。みちるたちも立っているのがやっとの状態だった。

「確かこの辺りだったわよねえ」

梨花子が森の奥へ入っていくが、すぐに引き返してくる。

「いないわぁ。見間違いだったのかしらぁ」

「アタシだって見てんだ。あれは確かに人だった」

「じゃあ、やっぱりお化けかしらぁ」

瞳を輝かす梨花子に反して、輝の顔が青ざめる。

「変なこと言ってんじゃねえよ！」

輝が梨花子の頭を小突く。

「ちよっとお。セツトが乱れるじゃないのお」

「何言ってるんだよ。この突風で乱れまくってるぜ！」

「はいはい。二人ともそこまで」

みちるは不毛な口論の仲裁に入る。

ポツ。

鼻の頭に何かが落ちてきて、みちるは天を仰いだ。

ポツ。

ポツッ。

それは雨だった。

「やだぁ。髪の毛が濡れちゃうう」

梨花子は両手で頭部を覆った。

「雨ぐらいでぎゃあぎゃあ言うな、緒方」

「だったら、輝は濡れていればいいじゃない」

「やだ。雨に濡れて風邪ひいたら困るだろう。デリケートにできて
いるからな、アタシの体は」

「デリケートお？ 大丈夫だってえ。輝なら絶対に風邪はひかない
からぁ」

「それってどういう意味だよ？」

みちるは仲裁にも入る気になれず、二人を放っておいてさっさと女子寮へと歩いていく。

「あ、みちるたらあずるいい！」

「待てよ、青葉！」

梨花子と輝が駆け寄ってくる。

雨足はどんどんひどくなり、斉藤の搜索は中断された。
みちるたちは眠れない夜を過ごした。

そして、翌朝。

台風は去り、体育館裏の森の中で斉藤の首吊り死体が発見された。

5..合宿終了は晴天につき(1)

台風一過の青空とは裏腹に、みちるたちの心境は土砂降りだった。齊藤が見つかったと報せを受けたみちるたちが駆けつけた時、ジエームスが齊藤の遺体を降ろしている最中だった。

正午すぎには警察が到着した。

気分が悪いといって自室で寝ている清香を除く全員が男子寮の食堂に集められた。

「まったく、何もこんな所で死ななくてもいいのによ！」

三条は大儀そうにイスにもたれかかり悪態をついていた。

竹ノ内は三条から少し離れた所に座り、小刻みに体を震わせている。顔色も悪い。唯一、自分のことを平等に扱ってくれていた齊藤の死はよほどショックだったのだろう。いや、ショックを受けているのは竹ノ内だけではない。ここにいる全員がショックを受けているのだ。

「アタシ、首吊り死体なんて初めて見たぜ」

「私だってえ、人生まっとうに生きてきてあんなの見るとは思わなかったわよお」

輝と梨花子もいつもよりも口数が少ない。

貴美枝が熟年刑事に事の経緯を説明する。熟年刑事は薄くなった頭頂をボールペンの尖端でかく。

「まあ遺書も発見されていますし、自殺とみて間違いないでしょう」
熟年刑事は事務的にそう答えた。

確かにあの状況を見れば誰もが自殺だと判断するだろう。だが、みちるには納得がいかなかった。齊藤が自殺する原因が見当たらなかったからである。竹ノ内ならともかく、いじめに遭っていたわけでもなく、将来に絶望するなどということもありえない。まさか清

香にふられたことが原因だとも思えない。

みちるは遺書の内容が知りたかったが、それは無理なことだろう。仕方なく、斉藤が首を吊った現場である体育館の裏に行こうとする。

「みちるう、どこに行くのお？」

「ちよつとね」

「まさか体育館の裏に行こうとしてんじゃねえだろうな？」

輝にしては勘が良かった。

「やめときなよお。今勝手に動いたらあ貴美枝監督に怒られるわよお」

「その辺はうまくはぐらかしておいてよ」

みちるは梨花子たちの制止を振り切って、こっそりと食堂を抜けた。

体育館には斉藤の遺体が安置されていた。壁を通して斉藤の母親の嗚咽が聞こえてくる。斉藤の死の報せを聞いて、朝早く合宿所に駆けつけてきていた。

みちるはいたたまれなくなり、走り出した。

バシヤ。

「わっ」

昨夜の豪雨でできたぬかるみに足を取られ、みちるは無様に転んでしまう。

「もう最悪！」

みちるは泥だらけの手を振り上げて叫んだ。

その時、みちるの脳裏に衣服が泥まみれになっていた斉藤の遺体が浮かんできた。雨の中を走り回っていたのだろうか。それとも首

を吊るために木に登ろうとして何度も落ちたのだろうか。遺書が用意されていたことから斎藤の自殺が衝動的でないことがわかる。それなら木に登るための脚立を用意していてもおかしくない。脚立が倉庫の中にあるのは、斎藤も知っていたはずだ。

黙考していると、眼前に手が現れる。

「青葉さんは濡れるのが好きなのですね」

ジェイムスが手を差し伸べていた。

みちるにはその言葉が皮肉に聞こえて、ジェイムスの手を断り自力で立ち上がる。ハーフパンツがお尻にペタリとくっついて何とも言えない不快感を味わう。

「好きで濡れているわけじゃないわよ」

みちるは斎藤が首を吊った大木を見上げる。森の入り口付近にある大木は誰の目にもつきやすい。昨夜の搜索の時点ではここに斎藤はいなかったという。では、いつ首を吊ったのだろうか。しかも、こんなに人目につきやすい場所で。

人はどんな時に自らの命を絶ちたいと思うのだろうか。

「どうして斎藤キャプテンは自殺しちゃったのかな」

「斎藤くんの死因は頸部圧迫による窒息死だと思われます。後頭部に打痕もあったそうです。」

死亡推定時刻はまだわかりませんが」

みちるはジェイムスの言葉に目を見張った。

「どうしてそんなこと知ってるの？」

「実は今ここに来ている県警の刑事が驚いたことにボクの幼馴染みでして……こっそりと教えてもらいました」

「それっていいの？」

「そこはオフレコということにしておいてください」

みちるはあえて追求はせず、自分の好奇心を優先させた。

「斎藤キャプテンは頭をケガしていたってこと？」

「気になりますか？」

「死にたいって思う人の気持ちはわかりたいとは思わないけど、あ

たしは納得がいけないことは自分がちゃんと納得するまで追求したいの」

「ボクでよろしければお力になりましょうか？」

「いえ、けっこう。あたしは人材派遣に依頼するようなお金は持ってませんから」

「青葉さんからお金をいただこうなんて思っていないですよ。ボクが個人的に青葉さんに協力したいだけですから」

ジェイムスの太陽にも負けないくらいのまぶしい笑顔に恍惚するみちる。

「青葉ーっ！」

輝の怒声で我に返るみちる。輝はジェイムスの手前引きつつた笑顔を作ってやってくる。

「もうすぐフェリーが来るから帰り仕度を……、って。何で泥まみれなんだ？」

「ちょっと転んで」

「ドジだな、お前。な？ ジェイムス監督
ジェイムスに同意を求める輝。

「そんなことはありませんよ。女の子はちょっとドジな方がかわいいと言いますし」

「あー」

輝がわざとらしくこける。

「大丈夫ですか、神宮寺さん」

「……………」

みちるはあきれて言葉も出てこなかった。

5..合宿終了は晴天につき(2)

「疲れた」

みちるはフェリーから真っ先に降りる。十二日ぶりの本土だった。帰りのフェリーの中は空気が重かった。輝と梨花子のバトルが拍車をかけたのだが。

「あれは……」

みちるの目に見覚えのある真っ赤なスポーツカーが映る。

「すっげー、あれってフェラーリ599じゃん」

後から降りてきた輝は、スポーツカーに気付いて瞳を爛々に輝かせた。輝の兄が外車好きで、輝もその影響で外車知識は豊富だった。

「そんなにすごい車なのお？」

「三千万くらいはするんじゃないか」

「誰かのお出迎えかしらあ？」

梨花子と輝の会話を聞きながら、みちるはそのフェラーリ599から降りてくる女性を見つめた。

ウェーブした琥珀色の長髪。

真紅に濡れた厚みのある唇。

ブランドもののサングラスで目はよくわからない。

装飾品たちに彩られた指先。

そして、端然なボディーラインを隠すことなく、アピールしてくれる洗練されたドレス。

こうして姿を見るのは初めてである。

女性は妖艶なオーラを振りまきながら華麗な足取りで歩いてくる。いつもは色っぽいと思っていた梨花子が幼く感じる。

「ええ、こっちに来るわよお」

「もしかして青葉のお迎えか？」

「そんなわけではないでしょう」

女性はみちるたちを素通りしていく。大人の芳香に、みちるはめまいを感じた。

「ただいま戻りました」

「おかえりなさい、ジェイ。とんだ災難だったわね」

その言葉を聞いて、みちるたちは一斉に振り向いた。

「ずいぶんとかわいらしい女子高校生がいたみたいだけど、つまみ食いなんかしていないでしょうね？」

女性はみちるたちを一瞥すると、ジェイムスの両頬に両手を当てて嬌笑する。

二人のただならぬ雰囲気に、輝と梨花子は呆然とする。

「冗談はやめてください。彼女たちがひいているではありませんか」

「つまらない男ね」

女性はジェイムスの頬を軽く叩くと、サングラスを外してみちるたちの前に来る。長い睫毛がとても印象的なセレブ美人だった。

「何かお困りの際はぜひ当社にご連絡くださいね」

女性は胸元が大きく開いたドレスの隙間から名刺を取り出すと、それを一枚ずつみちるたちに渡す。キラキラと金色の光を放っていた。

輝も梨花子も女性の毒気に当てられたのか、一言も言葉を発しない。

名刺にはジェイムスにもらった名刺と同様のキャッチコピーが書かれており、その下には『代表取締役社長たかむらりんこ 村琳子』とある。

「それでは失礼」

琳子は営業スマイル（男ならまちがいなく瞬殺できる）を振りまきながらフェラーリ599に戻っていく。

「それでは皆さん、またお会いしましょう」

ジェイムスは社交辞令的なあいさつを残して、琳子の後を追った。まともなあいさつを交わすことなく、ジェイムスと別れたみちるたちだった。

「協力してくれるって言ったのに……」

みちるの呟きはフェラーリ599の轟音にかき消された。

みちるは走り去っていくフェラーリ599を見送りながら、小さな吐息をもらした。そして、別の意味で魂が抜けた二人がいた。

「あんな美人で金持ちな女が相手じゃ太陽を味方につけても勝ち目はないぜ」

「世の中って不公平よねえ」

輝と梨花子は号泣していた。

みちるはあえてジエイムスと琳子の仲を否定しなかった。

6..曇り空と晴れない心(1)

二日後。斎藤貴俊の葬儀は斎場でしめやかに行われた。

曇った天候のせいか、蒸し暑さを感じた。

喪服を着た大人たちより、秀越高校の制服を着た生徒たちは大半を占めていた。

喪主である斎藤の父親は涙を堪えながらあいさつを述べている。斎藤は父親似だったのだろう。角張った顔の骨格がよく似ている。白髪も多くやせ細った姿は、みちるの父親よりずっと年上のように見えた。母親の方はすっかり気落ちしている。あの日以来ずっと泣いているのだろう。その横にいるのは弟だろう。まだ中学生のようにだが、号泣する母親を気丈に慰めている。

輝と梨花子もそんな姿を見てもらい泣きしている。

清香も参列していたが、声をかける気にはなれなかった。清香の横には三条がいたからである。三条は清香の肩を抱き寄せて、まるで自分の物であるかのようにアピールしていた。その後ろには竹ノ内が立っていた。竹ノ内は合宿が終わってからずっと何かに怯えているようだった。

みちるはこれからのバスケットボール部の行く末を案じた。

「子供が自分より先に死んでしまうことほど辛いことはないわ」

貴美枝がそう呟いたのが聞こえた。退院したばかりの萩野が寄り添っている。二人はおしどり夫婦で校内でも有名だった。しかし、子供はいない。もしこの二人の間に子供がいたならばバスケットボールの名プレイヤーになっていただろう。

みちるは貴美枝の言葉を聞いて、両親より長生きしよう感慨を新たにした。

斎藤の出棺を見届けると、みちるたちはバスケットボール部がチ

ヤーターしたバスに向かう。

「青葉さん」

清香に呼び止められる。

「私、三条くんの家の車で送ってもらうことにしたから貴美枝監督にそう伝えておいてくれるかしら？」

「あ、あの真木キャプテンは斎藤キャプテンが死んで……そのショックじゃないんですか？」

「同じバスケットボール部部員としては悲しいわよ。でも、斎藤くんにはそれ以上の感情を持ったことないから」

抑揚のない清香の返事に、みちるは愕然とした。

自分があこがれていた真木清香という人間がわからなくなっていた。

「それじゃあ後はお願いね、新キャプテン」

清香はそう言って、三条の元へ駆けて行った。

「なんだか合宿が終わってからあ真木キャプテンってキャラが変わっていなあい？」

「だよな」

梨花子も輝も同じことを感じていたのだろう。しかし、みちるには清香を責める気にはなれなかった。ただあこがれの存在であってほしいと勝手にイメージを押し付けていただけで、本当の清香を見ようとしなかっただけなのかもしれない。

6..曇り空と晴れない心(2)

帰りのバスの中では終始無言だった。秀越高校に戻ってきたみちるは、重い気持ちを抱えたまま家に帰る気にはなれなかった。

「ごめん。あたし、ちょっと汗流してから帰る。貴美枝監督にも許可もらったし」

「そっか。無理すんなよ」

「じゃあ私たちは帰るわねえ」

そう言って、輝と梨花子は帰っていった。

みちるは体育用具室からバスケットボールを一つ持って、体育館に入る。いつもなら部員たちの掛け声で活気にあふれている体育館も主たちを失ってひっそりと静まり返っている。

ボールをドリブルする音だけが寂しく木霊する。

自分が信じていたもの、見ていたものは一体何だったのだろうか。体を動かしていなければ、このやりきれない思いを消し去ることができなかった。

みちるはチェンジアップで、ディフェンスする梨花子のイメージを振りきってレイアップシュートする。しかし、ボールはリングに跳ね返り、シュートに失敗してしまう。

ボールは虚しく転がっていく。

「あちゃー」

みちるは慌ててボールを拾いに行く。

と、ボールは扉口に立っていた体躯の良い青年に拾われる。

「どうした、青葉！ ディフェンスもないのにシュートを外すとは。オレがいなくなってふぬけになっちゃったか？」

館内に怒声が響く。

「天道先輩？」

みちるは驚愕の声を上げる。

天道はボールをシヨルダーパスしてくる。受け取った手がじんじんと痛かった。

「少しは手加減してくださいよ、天道先輩……ぷっ」

みちるは天道の顔を見て思わず吹き出してしまう。

高校時代スポーツ刈りだった天道の髪型がスキンヘッドになっていたからだ。しかも、黒いスーツ姿に違和感があり、これでサングラスでもかけていればヤクザにでも間違われそうだった。

「何がおかしい？」

「だって、天道先輩……その頭……ぷっ」

みちるは笑いすぎてしゃべることができなかった。胃がよじれそうになり、涙まで出てくる始末である。このまま笑い死にしてしまうのではないだろうかと心配になってくるくらいだ。

「お前にはこの頭の良さはわからんだろうな」

天道は自慢そうに自分の頭をなでる。

わかりたくない、みちるは胸中で思った。しかし、こんなにお腹を抱えて笑ったのは何日ぶりだろうか。

笑いがやっと治まった頃、みちるは天道の頭を見ないように心掛けた。

「もしかして、天道先輩も斎藤キャプテンの葬儀に来てたんですか？」

「のつもりだったんだけどな。アメリカに遠征中だよ。急いで帰ってきたんだが、間に合わなかった」

「そうだったんですか」

高校卒業してから四ヶ月ぶりに見る天道は、ますますたくましさに磨きがかかっていた。こんな形での再会でなければ、もっと素直に喜べるのだが。

「それより、貴美枝監督から聞いたぞ！ お前、キャプテンになったんだってな」

「ええ、まあ」

みちるは言葉を濁した。

「そっか。お前もじゃんけんは強い方だったからな」

「じゃんけん？」

「キャプテン選び、じゃんけんで決めたんだろう？」

「も、もしかして、天道先輩の時はじゃんけんだったんですか？」

「実力も運のうち、ってな」

豪快に笑う天道。

みちるは絶句した。

「よし、じゃあオレが新キャプテンの実力を試してやろう！」

天道はネクタイを外し、シャツを脱ぎ捨てる。ランニングシャツのみになった天道の上半身は筋肉の塊だった。

ユニフォーム姿で見慣れているはずのみちるだったが、頬が紅潮していくのがわかり、心臓の鼓動がどんどん速くなっていく。

「どうした、青葉？」

「あ、いえ。願います！」

コートに入った天道の表情が変わった。それはまるで狩りを楽しむ獰猛な獣のようだった。

みちるは気合いを入れる。天道と1オン1をするのは中学二年生の時以来である。

みちるはドリブルでゆっくりと進みながら天道の様子をうかがう。身長差は約30センチ。

鉄壁のディフェンスを崩して先へ進むのは至難の業である。チェンジアップやフェイクが通じる相手ではないことは充分承知している。

「ガードが甘いぜ！」

天道が筋肉で固められた右手を突き出してくる。みちるはボールをいとも容易く奪われてしまう。

みちるが戸惑っている間に、天道はジャンプシュートを決めていた。

「どうしたどうした？ ドリブルにいつものキレがないぞ！」

「天道先輩がアメリカ遠征に行ってますます強くなったからそう感じるんですよ」

「なわけないだろう！ ほら、もう一本！ お前がシュートを決まるまでどんどん行くぞ！」

「そんなの無理ですよー！」

天道の青春熱血パワーが炸裂していた。こうなった天道はもう手が付けられない。この勢いだと本当にシュートを決めるまで終わらせてくれそうになかった。

「でも、良かった」

「何がだ？」

天道が目を丸くする。

「天道先輩は変わらないから」

「そりゃあどういう意味だ？ さっきはオレの頭を見て死ぬほど笑ってたくせによ」

「外見じゃなくて、その……」

みちるは合宿と斎藤の葬儀での一件を天道に話す。

「真木は自分にメリットのある人間としか付き合わないからな。そういうえば、オレがキャプテンになった時はオレと付き合いたいって言ってきたこともあったな」

「そうなんですか？」

「けど、オレはバスケ一筋で女と付き合う気なんてなかったからすぐに断ったけどな」

天道らしいと、みちるは思った。

「だから、あたし人を信じることに自信がなくなってきた……」

「オレは考えるのが苦手でいつも行動が先に出ちまうタイプだから、お前のような悩みのつてのはわかんねえけどよ。一つだけ言えることがある！」

天道は胸を張る。

「バスケが好きな奴に悪人はいない！」

「その根拠ってどこから生まれてくるんですか？」

「オレのバスケ魂だ！」

自信満々に断言する天道を、みちるはある意味尊敬した。思わず

笑みがこぼれてくる。

「あんまり気にするなよ。人にはそれぞれ信じてるモンがあつて、それがたまたま青葉と違つちまっただけなんだろうから」

「ありがとうございます、天道先輩！ 少しは気が楽になりました」

「そうか？ なら、続き！ な？」

天道がボールをバウンドパスしてくる。

「……はい」

みちるは苦笑した。このままはぐらかして帰ろうと思っていたが、そんな簡単に解放してくれる天道ではなかった。

みちるは無心になってオフセンスに心掛けるが、天道の容赦ないディフェンスにシュートチャンスすら与えてもらえなかった。

これで何ゲーム目だろうか。もう数える余裕すらなくなっている。滴り落ちる額の汗をぬぐいながら、みちるはドリブルする。目線は天道から離さない。

天道との間隔を徐々に詰めていく。

みちるは意を決して、シュート体勢に入る。当然、天道がブロックしようとジャンプしてくる。

みちるは後方に飛んだ。

「フェイダウェイ・ジャンプショットっ？」

驚愕する天道。

みちるはリングを見つめ、ボールを放つ。

ボールはみちるのイメージ通りにキレイな弧を描いていく。

リングが心地良い音を立てて、ボールを飲み込む。

「やった！」

みちるは着地と同時にシュートが決まったことを確認した。が。

「え？」

みちるは安堵したせいか、バックダッシュ後にバランスを崩して派手に転倒してしまう。

「きゃっ！」

「すげえじゃねえか、青葉！ お前、いつの間にあんなテクニクを身に付けたんだよ？」

天道が興奮して駆けつけてくる。

みちるは半身を起こす。

「一か八かの賭けだったんです。これぐらいしないと天道先輩からゴールは奪えないと思っていたから」

「何事もチャレンジ精神は大切だからな」

天道はそう言って、手を差し伸べてくる。

みちるは手を伸ばそうとして、スカートがめくれていることに気付いた。

「！」

みちるは慌ててスカートを直す。こんなことならスカートの下にハーフパンツをはいておけばよかったと後悔する。

しかし、天道は全く気にした様子はなかった。逆にそれはそれで悲しいものがあるが。

「ん、どうした？」

「天道先輩って、ホントにバスケ一筋なんですネ」

「おう、もちろんだ」

みちるは天道の手を借りて立ち上がる。

「あ、今何時だ？ ゲームに夢中になりすぎちゃったぜ。新幹線の時間に間に合わなくなっちゃおう」

「もう大学に帰るんですか？」

「まあな。オレはこう見えても大学じゃ期待の新人だからな」

「そうですね。天道先輩ならすぐにNBAにだって行けちゃいますよ」

「お世辞言たって何もでねえぞ」

みちるは天道の脱ぎ捨てた服を拾って手渡す。

「天道先輩、今日はありがとうございました！」

「おう。青葉、また会おうぜ！」

天道は忙しく体育館を出て行った。

みちるは天道を見送りながら、四ヶ月前までの天道を想う気持ちと今の気持ちとの違和感に気付き、少しだけ寂しさを感じた。

6..曇り空と晴れない心(3)

天道が帰った後、体育館のモップ掛けをしていたみちるが家路についたのは夕方だった。

「あっ……」

みちるは青葉家の玄関先に立っている、黒スーツ姿の男性に気付いて声を上げた。

「ジェイムス監督？」

ジェイムスはみちるに気付くと、渋面から破顔へとその表情を変えていく。まるで捨てられた子犬が拾ってくれそうな人間を見つけた時のような喜ぶ顔にも見えた。

みちるはジェイムスの笑顔にきゅんと胸が締めつけられた。天道という時には感じたことのない感覚だった。

「もう監督ではないのですから、ジェイムスでいいですよ」

合宿が終わると同時に荻野が復帰して、ジェイムスは臨時監督の任を解かれていた。

「どうして、うちに？　もしかして、ストーカー？」

「違いますよ」

ジェイムスは動揺することなく、冷静に否定する。期待外れな態度にガツカリするみちる。

「ボクも斎藤くんの葬儀に参列していたのですが、青葉さんとお話するチャンスがなくて。そうしたら緒方さんと神宮寺さんが青葉さんのご自宅の住所を教えてくださいまして……」

「梨花子たちが？」

みちるは葬儀中の梨花子たちの行動に全く気付いていなかった。というか、何をこそそそとやっていたのだろうか、あの二人は。しかも、みちるに黙ってジェイムスに住所を教えたりして、一体何を

企んでいるのやら。

天道に元気付けられたばかりのみちるだったが、またしても人間不信に陥りそうだった。

「それですつと待っていたの？」

「はい、約束ですから」

「約束？」

みちるは覚えていたが、ジェイムスを試したくなり、あえて忘れたフリを試してみる。

「青葉さんの納得がいくまで協力すると、約束しましたよ」

「……………」

みちるはにっこりと微笑んで。

「しつこいようだけど、お金は払わないからね」
念を押した。

7..夕立ちと女心はすぐ晴れる(1)

「やっぱりこのデラックスプリンアラモードが一番だよな」

「そおう？ 私はデラックスフルーツパフェが一番美味しいと思うんだけどお」

「青葉は」

「みちるは」

「どっちが一番美味しいと思う？」

輝と梨花子がファミレスのメニューを見ながら、異口同音で聞いている。

「あたしはデラックスプリンパフェ」

むすつとして答えるみちる。

これからのことを相談しようと思ったファミレスの前で、明らかに偶然を装って現れた輝と梨花子だった。神出鬼没とはこのことを言うのだろう。

「ボクはアイスココアをお願いします」

ジェイムスはウェイトレスに無意味に笑顔を振りまいている。若いウェイトレスはジェイムスの笑顔をいう毒牙に引っかかり、頬を紅潮させて注文を確認すると戻っていく。

「やあねえ、みちるったら。何むすーつとしているのお？」

「ホントホント。こうしてまたジェイムス監督と再会できたんだから、もっと喜べよ」

「誰かさんたちはわたしより先に再会していたんじゃないの？」

「神宮寺さん、もう監督はよしてください」

「でも、『ジェイムス』だなんて恥ずかしくて言えないぜ！」

輝がグラスの水滴でのの字を書く。

みちるの皮肉は例によって例のごとく無視された。もっともその

原因を作ったのはジェイムスだが。

「しっかり言ってるじゃないの」

負けずと、みちるは聞こえるように毒づく。

「じゃあ、私のことも『梨花子』って呼んでくださいねえ、ジェイムス」

「アタシのことは『輝』って！」

二人は競ってジェイムスにアプローチしていた。

みちるたちは四人掛けの丸いテーブル席にいた。ジェイムスを挟むようにして、輝と梨花子が左右に座っている。みちるはジェイムスと向き合うような形で座っていた。

二人はジェイムスにみちるの住所を教えることで、こうなることを予想していたのだろうか。

みちるはテーブルに肩肘ついて、本日初の超特大のため息を吐き出した。

「あたしも『みちる』でいいですから」

みちるも宣戦布告した。三人の間で激しい火花が散ったように見えた。

「みちるったらあ、天道先輩がいるのにそんなこと言ってもいいのお？」

「仲良く1オン1やってたじゃん」

梨花子と輝が小悪魔的な笑みを浮かべる。

「あ、あんたたち帰ったんじゃないの？」

「みちる一人だと寂しいから付き合ってあげようかなあって思ってたえ、体育館に行ってみると天道先輩がいるんだもおん。驚いちゃったあ」

「そうそう。あまりのラブラブぶりに、声も掛けられなかったもんな」

「あ、あれは先輩と後輩のコミュニケーションで……、天道先輩はバスケのことしか頭になくなって……」

言い訳をするみちる。

「良い先輩をお持ちなのですね。それにしても、皆さんはセーラー服がとてもお似合いですね」

画策する三人の乙女の気持ちを知ってか知らぬか、ジェイムスはまたしても罪深い言葉をのたまってしまふ。

輝と梨花子の瞳から闘争心は消え、恍惚している。

このままでは話が先に進まないと直感したみちるは、二人を無視することに決める。

「ジェイムス、さんはあたしの納得できる回答を持ってきてくれたってことだね？」

さすがに呼び捨てすることに抵抗を感じて、みちるはぎこちなく『さん』付けで呼んでみた。

「納得していただけるかどうかわかりませんが、斎藤くんの遺書の内容をお教えしたいと思ひまして」

「遺書？　そういえば、刑事がそんなこと言ってたけど、新聞には遺書はなかったって書いてあった」

みちるは昨日の新聞で小さく書かれた斎藤の自殺の記事を読んでいた。

その言葉に反応した輝と梨花子も真摯の表情へと変わる。

「斎藤くんの遺体といっしょにあったのですが、どうやらもみ消されたりしくて」

「もみ消された？　どうして？」

「詳しいことはわかりませんが、どこからかの圧力がかかったのでしょう」

たかが高校生が自殺した遺書をもみ消さなければならぬような重要なことが書かれていた遺書だったのだろうか。みちるはますます遺書の内容が知りたくなった。

「もしかしてえジェイムスって刑事さんだったのお？」

「ウソ？　マジ？　でも、ジェイムスが刑事ならアタシ逮捕されてもいいぜ」

梨花子と輝の間でやはり小さな攻防戦が続いていた。

「残念ですが、ボクは刑事ではありません。刑事になりそこねた男です」

ジェイムスは微笑する。

「ボクは交通機動隊に入るのが夢だったのです」

「時々、密着二十四時とかって特番やってるみたいなのやつだろう？」

輝がそう言うと、ジェイムスがうなづく。

「ですが、ボクは免許が取ることができなくて……あきらめなければいけなくなったのです」

「ええ？ 運動神経はいいのにい？」

梨花子が大仰に驚いてみせる。

「あれは十八歳の冬休みでした。車の免許を取るために、ボクは期待に胸をふくらませて自動車学校に通いました。そして、念願の実技に入った時」

ジェイムスは当時を懐かしむようにキラキラ星を瞳に浮かべてしゃべっていたかと思うと、急に暗黒大星雲な瞳になり一億光年彼方を見つめる。

「ボクはコースを一周もしないうちに酔ってしまったのです」

「酔った？ 自分で運転してたのに？」

みちるは思わず突っ込む。

「はい。でも、不思議なこともありまして、人が運転する車に乗るのは平気なのですが、なぜか自分の運転では酔ってしまうのです。

それはバイクでも同じでした。ですから、ボクは免許を取るのを諦念したのです」

「はあ」

みちるはフォローに困り、苦笑するだけだった。

そこにタイミング良くウェイトレスが、アイスココアを運んでくる。続いて、デラックスプリンアラモード、デラックスフルーツパフェ、デラックスプリンパフェもやってくる。

「すみません。話が脱線してしまいましたね。ですから、ボクは刑事ではありません。ただ幼馴染に刑事がいたものですから、いろいろ

ろと教えていただいていたのです」

「合宿の時に来ていた刑事さんでしょう？　でも、いくら幼馴染だからってそんなに簡単にしゃべってもいいの？」

「正確に言いますと、ボクにはではなく社長にですが……。彼もうちの社長には頭が上がらなくて」

「社長って、この間迎えに来ていた人でしょ？」

みちるの言葉に、輝と梨花子が大きく反応を示した。しまったと、後悔したが後の祭りである。

「あの女、ジェイムスの会社の社長なのか？」

「ってことはあ、ジェイムスとの関係は社長と社員っていうだけであそれ以上の関係はないんだあ」

「もちろんですよ。でも、あの人がいなければ今のボクも存在していませんが」

意味深な言葉を残しながらも、女社長との関係を聞いた輝と梨花子はますます闘志を燃やし始めた。

「で、遺書の内容って？」

いつまでたっても先に進まないことに業を煮やしたみちるは、強引に会話を本題へと戻す。

7..夕立ちと女心はすぐ晴れる(2)

「はい。ワープロ打ちで『ボクは不正をしました。この罪は死をもつて償います。許してください』と書かれていたそうです」

「不正？ あの斎藤キャプテンが？」

輝がプリンを口に運びながら言う。

「斎藤キャプテンはスカウトされて秀越高校に入ったんだから裏口入学とかってありえないわよねえ」

首を傾げながら、梨花子が小さい口で黄桃を食べる。

「三条だったら充分ありえる話だけどな」

「そうよねえ。三条くん、お世辞にもバスケが上手とは言えなかったもんねえ。そんな人がキャプテンっていうのもいやよねえ」

「三条の親父がうちの高校に多額の寄付をしているらしいからさ、学校側としても断りきれなかったんじゃないか？ バカ息子を持つと親も大変だよな」

輝と梨花子は冗談半分に面白がって言う。一度はカレシにしようと思った男も今やこの言われようである。さすがのみちるも少しだけ三条に同情した。

「考えられるのは、そのキャプテン選びくらいしかないかな」

みちるは左手で頬を支えながら、スプーンをプリンへと伸ばしていく。

「キャプテン選びですか？」

「そうよ。秀越高校のバスケ部ってけっこう全国に名を馳せているから、キャプテンになると有名な体育大から好条件でお誘いがくるのよ」

「そうそおう。みちるの大好きな天道先輩がそうだったもんねえ。みちるも同じ体育大に行くのかなあ」

「いいよな。惚れた男と同じ大学に行けるなんて」

梨花子と輝が横やりを入れてくる。

「違うって！ 天道先輩はバスケットで女の子に興味なんかないんだって！」

みちるは焦って否定する。ジェイムスに誤解されなくなかった。「なるほど。それでキャプテンを選ぶのにあんなテストをしていたわけですね」

しかし、ジェイムスは梨花子たちの話が耳に入っていない様子だった。

みちるは安堵し、輝たちは悔しがる。

「まあそういうこと。テストの内容も毎年変えて秘密にしているみたいだし。けっこう重要みたい。キャプテン選んで」

去年が右脳ゲームで一去年がじゃんけんだったというところが信憑性に欠けるが。

「だから青葉はもう将来が約束されたようなもんだよな」

「いいわよねえ。大学受験の苦労がない人はあ」

またしても、輝と梨花子が割り込んでくる。

「では、斉藤くんはもう行く大学が決まっていたということですか？」

「決まってたんじゃないかな。だから自殺する原因が余計わからないのよね」

「あれ、青葉は聞いてなかったのか？」

輝は動かしていたスプーンを止める。

「何を？」

「斎藤キャプテンのお父さんの会社、先月倒産したんだぜ」

「家も売却されて、今はアパート暮らしなんだってえ」

輝の後を梨花子が続ける。

「どうして輝たちがそんなこと知ってるの？」

みちるが怪訝な顔をして二人を見る。合宿中にもそんな話題は一度も出てこなかった。

「だってえ葬儀の時に誰かが話しているのが聞こえちゃったんだも

おん」

梨花子が悪びれることなく平然と言う。ジェイムスのことと言い、葬儀の時にこの二人は何をしていたのだろうか。

「斎藤くんは父親の会社が倒産してしまい、経済面で困っていたのかもしれないね」

「だからって、自殺するのも」

みちるは言葉を切った。一つの仮説が浮かんだからである。

「斎藤キャプテンの家庭の事情を知って誰かがお金でキャプテン選定のテストの内容を聞きだそうとした……」

誰かというのは、三条のことだが。あの男ならやりかねない。すべてをお金で解決しようとするだろう。もしこの仮説が正しければ、三条がキャプテンに選ばれたことも納得がいく。

「じゃあ斎藤キャプテンはそのことを悔いて自殺したっていうのをお？」

「それとも不正をバラされたくなければ金を出せとかいって斎藤キャプテンが三条を脅迫して、困った三条が自殺に見せかけて殺したとか？」

梨花子と輝は意味深な笑みを作る。テレビドラマの見過ぎである。みちるはあきれて突っ込む気にもなれなかった。

「それはちよつと飛躍しすぎではないでしょうか」

ジェイムスはアイスコアを一口飲んで続ける。

「もし仮に三条くんが斎藤くんを殺したとしても、偽造した遺書に自分が不利になるようなことは書かないと思います」

「だったら、やっぱり自殺か」

輝がつまらなそうに呟く。この状況下を楽しんでいるように見えた。しかし、みちるには輝を責めることはできなかった。自分もただ興味本位で斎藤の死を調べているだけなのかもしれないと思ったからである。

「とは言うのものの、自殺という一言で片付けてしまうには斎藤くんの死に不審な点が多いと思います」

「何？」

みちるはジェイムスの次の言葉を待った。

「これは前にも言いましたが、斎藤くんの後頭部には打痕が一箇所あります。首の周りには爪で引っかいた痕があったそうです」

「引っかいた痕、ってことは……」

「はい。誰かに首を絞められて抵抗したのかもしれませんが、首を吊った直後に苦しくなってもがいたのかもしれませんが」

「どっちかわからないってことじゃない」

みちるは肩透かしを食らった気分だった。

「もう一つわかっていることがあります。死亡推定時刻が、二十二人前後だということです」

「それって新キャプテン襲名パーティをやっていた最中じゃないの！」

みちるはファミレスにすることを忘れて、声を荒げてしまう。客の何人かの視線がこちらに集中する。しかし、みちるは気にしなかった。一つの不安が脳裏をよぎったからだ。

「合宿中に思ったのですが、二年生の男子はキャプテンになりたかった部員が多かったみたいですね」

「そりゃあそうだ。女子にだっていたくらいなんだから。もっとも男子は三条がいたおかげで表にはそういう感情を出さなかったみたいだけだな」

輝の目線が梨花子に向いた。梨花子は気付いていないのか、バリアイスクリームを口に運んで堪能している。

輝も梨花子もキャプテンになりたがっていた。実力でいえば、輝も梨花子もみちるより上手い。しかし、誰がキャプテンに選ばれても恨みっこなしが三人の約束だった。

「そこでボクも一つの仮説をたててみました。三条くんの不正がなければ正当なテストで誰かがキャプテンに選ばれるはずでした。その誰かが三条くんの不正を知ってカッとなって斉藤くんを殺してしまった」

「でも、それだと斎藤キャプテンではなく、三条を殺そうとするんじゃない？」

「確かにそうです。だからこそ、斎藤くんを自殺に見せかけて遺書を偽造して三条くんの不正を暴こうとしたのではないのでしょうか？ その方が三条くんへのダメージも大きいでしょう。ですが、斎藤くんの遺書の存在はもみ消されてしまい、三条くんの不正を公にすることができなくなってしまった」

「じゃあ、斎藤キャプテンの遺書をもみ消したのって三条の父親？」

「妥当な意見ですね」

「ジェイムスが言うとおすつごくリアルに聞こえるから不思議よねえ」

「でも、当たってんじゃないか？」

感心する梨花子と輝。

ジェイムスの話からキャプテンに選ばれる可能性の高い男子部員を絞ると、竹ノ内の存在が浮上してくる。竹ノ内は気が弱い、バスケットボールは二年生の中で一番上手い。キャプテンとしての器は持ち合わせていないようだが、三条よりはマシだ。だが、あの気弱な竹ノ内がいくらカッとなったらといって、斎藤を殺したりするだろうか。しかも、自殺に見せかけるような知能犯になるとも思えない。三条なら日頃の恨みもあり衝動的に殺害してしまうことはあるかもしれないが。

しかし、斎藤の死後、竹ノ内は必要以上におどおどしている。斎藤の葬儀の時もずっとうつむいて小刻みに震えていた。不審な点が多いのは竹ノ内だが。

「その話だと失敗した犯人は何かして三条に復讐しようと考えてるんじゃないの？」

「ごもつともな意見ですね」

「うーん」

みちるは頭を抱えた。

そして、最終的に出た答えとは。

「三条に会ってみよう！」

ここで意味のない仮説ばかりをたてても仕方がない。時には天道のように考えるより先に行動する方が道を切り開くこともある。あの三条が素直にすべてを話してくれるとは思わないが。

「ええ？」

「本気で言ってるのか、青葉？」

梨花子と輝が露骨に嫌そうな顔をする。

「いいのよ。あんたたちはここでゆっくり食べてれば。あたしとジェイムスで行ってくるから」

「な、何言ってるんだよ！ 行くに決まってるだろう！」

輝は食べかけのデラックスプリンアラモードを頬張る。梨花子はデラックスフルーツパフェをいつの間にか完食していた。もちろんみちるも完食済であるが。

ジェイムスのはのん気にアイスココアを飲んでいた。

7..夕立ちと女心はすぐ晴れる(3)

みちるたちはファミレスを出た。勘定はもちろんジェイムス持ちで。

オレンジ色の夕焼け雲がいつの間にかグレーに染まり、辺りを薄暗くしていた。

「何だか探偵みたいだねえ」

「『犯人はお前だ!』とかって言ってみたいな」

最初は乗り気でなかった梨花子と輝はすっかりその気になっていた。

「張り切るのはいいけど、あんたたち三条の家がどこにあるか知ってるの?」

半ばあきれて、みちるが言う。

「青葉が知ってんだろう?」

「知ってるわけないでしょう」

「だったら、三条に会いに行くなんて言うなよな」

「仕方ないでしょう。あたし、三条のこと最初から嫌いだったんだから。輝こそ、三条のこと狙ってたんなら家ぐらい知っておきなさいよ」

「そんな面倒なことできっかよ」

「はあい、私知ってるわよお」

ケンカ腰になりつつあったみちると輝の間に、梨花子が入ってきて得意気に右手を挙げる。

「何で梨花子知ってるの?」

「だってえ、将来私が住む家になっていたかもしれないしい」
当たり前のように言ってるのける。

親睦会までは本気で三条のことを狙っていた梨花子は、三条がど

んな家に住んでいるのかを事前にチェックしておいたらしい。梨花子らしい行動であるとあきれたが、結果として三条の家を探す手間が省けたのだから文句は言えなかった。

三条の自宅は今いる西桜市にしざくらから電車で二駅ほど行った上園市かみその内の高級住宅街にあった。梨花子の話によると、芸能人も住んでいるらしい。

上園駅で電車を降りると、徒歩で高級住宅街まで向かう。

こういう時に車があれば便利なのだろうとみちるは思ったが、ジエームスがあれば期待するだけ無駄である。

「アタシたち貧乏人には縁のない世界だな」

輝はキョロキョロと見回して嘆息した。

そこは豪華な家が立ち並ぶ閑静な住宅街だった。

「私はあ玉の輿に乗って早くこんな家に住みたいなあ。お手伝いさんとかもいっぱいいてえ」

梨花子の中でも一番大きな豪邸を羨望の眼差しで見つめた。

「大きな家に住むことが幸せとは限りませんよ。小さな家でも家族が仲良く暮らしていければそれが一番の幸せなのです」

「だよな！ アタシ、ジエームスとなら例え六帖一間のアパートでもかまわないけどな」

「あらあ、私はやっぱりジエームスと豪邸に住みたいわあ」

「六帖一間のアパートだ！」

「豪邸よお！」

「青葉は」

「みちるはあ」

抗弁していた輝と梨花子はみちるの方を向き、

「どっちに住みたい？」

異口同音で聞いてくる。

「はいはい。夢物語はいいから早く三条の家に案内してよ」

みちるは梨花子の手を引っ張った。

「もうみちるったらあ、引っ張らないでよお。ここが三条くんの家なんだからあ」

梨花子は先刻見ていた一番の豪邸を指差した。

「ここ？」

「三条の奴、こんなでかい家に住んでたのかよ？」

みちると輝はぽかーんと口を開けて見つめる。三条には不似合いな洋館の家だった。どこまでも続くレンガの外堀の向こう側には、バラ園が広がりその中央には陶器製の天使像の噴水がありそうだった。

みちるはレンガ造りの門柱にあるインターフォンを押した。すぐに年配の女性の声が返ってくる。

「あの、秀越高校バスケットボール部の青葉みちると言いますが、三条光彦くんはいらっしゃいますか？」

「坊ちゃんなら外出しております」

インターフォンから抑揚のない無機質な返事がきた。

「坊ちゃまって、ツラかよ」

背後で輝が小さく呟く。みちるも胸中で同意した。

「仕方ありませんね。また明日にでも来てみましょう」

「あたし、ここで待ってる」

みちるは焦燥感にかられていた。早く三条に会って、真相を突きとめたかった。

「もうすぐ日も暮れます。天気予報では夕立になるかもしれないと言っていましたし、ここは一度帰った方が」

ジェイムスがみちるの肩に手を乗せる。

みちるはジェイムスの手を払いのける。

「いや！」

「どうしたんだよ、青葉。お前らしくないぜ」

輝はみちるの言動に啞然としていた。

「……ごめん」

「アタシに謝るんじゃないくて、ジェイムスにだろう」

輝に指摘されて、みちるは素直にジェイムスに謝った。

「ごめんなさい」

「大丈夫ですよ。そんなに焦らなくても三条くんは消えたりしませんから」

「うん……」

みちるは小さくうなだれた。

そんなみちるの気持ちに感応したのか、グレーの雨雲から大粒の涙がこぼれ始めた。

7..夕立ちと女心はすぐ晴れる(4)

「やだぁ！」

「マジかよ？」

梨花子と輝は雨を回避しようと走り出した。みちるは走る気になれなかった。

「みちるさん、急がないとまたセーラー服がびしょぬれになりますよ」

そう言って、ジェイムスがみちるの手を引っ張った。

「あそこの公園、ベンチに屋根があるぜ！」

輝の声に一同は公園に向かった。

「んもお、最悪う」

梨花子はハンカチで濡れた髪を一生懸命拭いている。

輝は濡れた犬のように全身を振り回し、雨を飛び散らせていた。

「もおう、輝ったらあ。こっちに散ってくるう！」

「少々のこと文句言ってんじゃねえよ」

輝はわざと大げさに全身を振り回した。

みちるは呆然とその光景を見つめていた。

「いくら夏だからといっても拭かないと体が冷えてしまいますよ」

ジェイムスがハンカチを差し出してくる。

「あ、大丈夫。自分ので拭くから」

「気になりますか、死亡推定時刻が」

ジェイムスの言葉に、みちるは拭いていたハンカチを落としそうになる。

「あの時……」

みちるは次の言葉を躊躇した。勘違いかもしれない。みちるは今自分が思っていることを口にする勇気がなかった。

しかし、ジェイムスもあの場にいた。確認するなら今がチャンス

かもしれない。

「あの」

と、みちるが言いかけて。

眼界に稲妻が走った。しばらくして、お腹に響き渡るような雷鳴が轟いた。

「きゃあ!」

わざとらしい悲鳴が聞こえてきたかと思うと、梨花子がジェイムスの右腕に、輝がジェイムスの左腕にしがみついていた。

「落ちてきたらあどうしようお」

「怖い、ジェイムス」

稲妻が見えてから雷鳴が聞こえるまでの時間を考えると、まだ遠い。しかも、いつもは稲妻がキレイなどと言って騒いでいる梨花子と輝である。雷が怖いはずがない。

また稲妻が走る。

「きゃあ!」

梨花子と輝が悲鳴を上げて、ジェイムスにしがみつく。

みちるはあきれて何も言う気にはなれなかったというより、自分は雷鳴を聞かないようにすることに必死だった。

そして、三度目の稲妻が走った。

直後、雷鳴が轟く。

「大丈夫ですよ、みちるさん。落ちてきたりしませんから」

ジェイムスの言葉に、みちるは自分がジェイムスの背中に抱きついていることに気付いた。

「ご、ごめん!」

慌てて離れる。

実は雷が大の苦手のみちるだった。周りに人がいる時は何とかやせ我慢できるが、あまりにも近くでなった時はさすがに我慢することができなく、自分の隣にいる人に抱きついたりしていた。

秀越高校に入ってからはその状況に陥ったことがなかったの
で、梨花子も輝もみちるの雷嫌いは知らないはずである。その証拠
に二人からの軽蔑の眼差しは厳しい。

みちるはいたたまれなくなり、ジェイムスから少し距離を置いた。
この豪雨の中、公園前の道路を走っていく黄色い車が眼界に入っ
てきた。

「あれ、ランボルギーニガヤルドじゃん。さすが高級住宅街！ 二
千万円もするような車が走ってるなんて」

外車通の輝は双眸を輝かした。が、その双眸から輝きは喪失した。
「三条？」

輝の言葉を聞いて、みちるも車を目で追った。

運転席に乗っているのは、三条だった。しかも、助手席には清香
がいる。

「三条ってあたしたちと同じ十七歳なのに、何で車の運転ができる
わけ？」

「んなの無免に決まってるだろう。オートマだったらアタシでも運
転できるぜ！」

「それよりい、真木キャプテンとすぐくブラブムードだったわ
よねえ」

動体視力が優れている梨花子には車内の様子がしっかりと見てと
れたのだろう。それは輝やみちるも同じだが。

それよりも気になったのは、車の進行方向だった。自宅とは逆方
向に向かって走っていた。ということは、さっきまで自宅にいて
みちるたちがいなくなったことを確認してから外出したことになる。
居留守を使ったということは、やはり何かやましいことがあるの
だろうか。

「この様子では明日も居留守を使われそうですね」
と、ジェイムス。

「明後日から二学期が始まるから嫌でも顔を合わせることはないな
らうんだけど、素直に登校するかどうかもしゃあわからない

わね」

みちるは嘆息して空を仰いだ。

夕立はいつの間にか止んで、雲の隙間から一番星である木星が輝いていた。

「明日、竹ノ内くんに会いに行ってみませんか？」

そう言ったのはジェイムスだった。

みちるは黙ってうなずいた。

8..夏休みの終わりに血の雨が降る(1)

翌朝、みちるは待ち合わせ場所である上園駅前に向かった。

本来ならば、夏休みの最終日だろうがバスケットボール部の練習はあるのだが、斉藤の一件でクラブ活動は一時休止になっていた。そのおかげでこうして自由な時間が与えられたわけだが。

昨夜もあまり眠れず、電車の中でウトウトしてしまい、あやうく乗り過ごすところだった。

みちるが到着した時には、輝が頬を紅潮させてジェイムスとのツーショットタイムを楽しんでいた。遅刻魔の輝が約束の時間である九時十分前に来ているなど普段ならありえないことだった。

輝はTシャツとショートパンツといった定番スタイル。

ジェイムスはポロシャツとチノパンツのラフな服装で爽やかさをますます引き立てていた。

「おはようございます、みちるさん」

みちるに気付いた輝は露骨に嫌な顔を向けてくるが、ジェイムスの颯爽とした笑顔が気だるい暑さを吹き飛ばしてくれる。

「あれ、梨花子は？」

「まだだぜ」

「珍しいこともあるもんね」

「そうか？ 緒方が遅れてくるのはいつものことじゃんか」

「そうだけど」

みちるは言葉を濁した。したたかな梨花子なら早めに来てジェイムスに好印象を与えようと画策すると思っていたが。輝がそうであったように。

「お前がスカートはいてくる方が珍しいと思うけどな」

輝のするどい指摘に、みちるはたじろぐ。確かにいつものみちるなら動きやすいジーパンをはくのだが、今朝は母親が何を思ったの

かコーディネートしてやると言い出して、無理矢理デニムのミニスカートをかされたのだった。上のパーカーシャツは定番だが。

「これはお母さんがバーゲンで買ってくれて、はけはけってうるさいから仕方なく」

みちるも慣れないミニスカートをかかれて困惑している。

「ふーん」

輝は信用していない様子である。

「セーラー服姿も素敵ですが、私服は皆さんの個性が表れていてまた一段と魅力的ですね」

ジェイムスの得意の褒め殺しが炸裂した。

輝が一撃ノックアウトされる。

「そんなホントのこと言われると照れるな」

そんな輝の姿を見て、みちるは嘆息した。

九時を過ぎるとプラットホームに電車が到着し、改札口から梨花子が出てくる。

みちるは梨花子の姿を見つけて声を掛けようとするが、思わず言葉が失ってしまう。

キャミソールとフリルのミニスカート。

いつも二つの分けてくくっていた髪は、一つに結い上げられていた。

今まで何度かプライベートで遊んだこともあるし、定番スタイルのはずなのだが、今日は雰囲気違って見えた。その風貌はどこか大人びていて、みちるが知っている梨花子とは別人のように思えた。

「遅いぞ、緒方！」

輝の声に我に戻るみちる。

「仕方ないでしょお。駅で何回もナンパされちゃって電車に乗り遅れちゃったんだもおん」

「ったく、世の男どもは見る目がねえな」

「ごめんなさい、ジェイムス」

梨花子は毒づく輝を無視して、ジェイムスの手を取って謝る。や

はりいつものしたたかな梨花子だ。

「それじゃあ全員そろったことだし、竹ノ内くんの家に行きましよう！」

みちるは梨花子の手をジェイムスから引き離す。

「質問！」

輝が右手を挙げる。

「竹ノ内の家、知ってんのか？」

「当然よ！ 昨日のうちにちゃんと調べておいたわよ。だから、待ち合わせ場所にここを選んだんじゃない」

みちるが胸を張る。

竹ノ内の住むマンションは三条の自宅がある高級住宅街の近くにあった。

「私だってえ、ちゃんと調べてきたわよお」

梨花子がジェイムスにピタリと寄り添う。

「アタシだってちゃんとリサーチしてきたんだぜ。でも、やっぱりキャプテンに華を持たせた方がいいかと思ってさ」

輝が慌てて言い訳をする。だが、調べてきたのはウソではないだろう。

「皆さん、さすがですね」

ジェイムスの破顔に、輝はすぐに上機嫌になる。

「じゃあ、行くわよ」

みちるは仕切り直して、竹ノ内の自宅に向かって歩き出す。

8..夏休みの終わりに血の雨が降る(2)

みちるたちは夏の日差しを避けるため、アーケードのある商店街へ入っていく。時間帯のせいか、商店街の店に配達に来ている軽トラックなどが多く、車が走りすぎていく度に排気ガスが混じった生暖かい風が吹いてくる。

みちるは排気ガスを撒き散らす軽トラックを睨みつける。

と、眼界に荻野夫妻が入ってきた。荻野たちはここから五軒先の花屋から出てきたところだった。

しかし、みちるは声を掛けるのをためらった。ジェイムスといっしょにいるところを見られるのは賢明ではないと思ったからだ。

「あの二人、ホント仲が良いよな」

気付いた輝が羨望の眼差しで見つめる。

「あんな夫婦になりたいわよねえ」

梨花子はそう言って、ジェイムスに熱い視線を送る。

輝も負けずと熱い視線を送る。今日の輝は後手に回ることが多い。スタートはジェイムスとツーショットになれていい感じだったのだろうが。本人も自覚しているのだろ。悔しそうに歯噛みしている。

もつともジェイムスは梨花子と輝の言動が意味することに何も感じていないようだが。

「そうですね、素敵なお夫婦ですね」

「誰かの見舞いにでも行くのかしらあ？」

「見舞いに行くのに菊は持っていないでしょう。お墓参りとかじゃない？」

みちるは貴美枝が手に持っている花束を見て、そう答える。よく見てみれば服装も黒系の地味な格好をしている。

「おそらくご子息のお墓参りに行かれるのでしょう」

みちるはジェイムスの言葉を聞いて驚愕する。

「え？ 貴美枝監督って子供がいたの？」

「青葉、知らなかったのかよ？ 三年前に交通事故に遭って……死んだんだ」

「ひき逃げだったそうです」

「そっか。それで貴美枝監督は斎藤キャプテンの葬儀の時にあんなことを言ってたんだ」

あの言葉は斎藤の母親を同情して言ったのではなく、貴美枝の実体験から出た言葉だったのだと、みちるは痛感した。

「それで犯人は捕まったの？」

「相手は未成年だったらしくて、不起訴処分になったらしいですよ」
「そんな……」

みちるは世の中の不条理に憤りを覚えた。そして、昨日無免許で車を取り回していた三条のこと思い出す。

「そういえば、輝さんは荻野監督の息子さんと同じ鳴岳第二中学校ではなかったですか？ 確か梨花子さんの出身校である鳴岳第一中学校とはよく練習試合をしていたとか」

「そういや、よく練習試合に行ってたな。緒方は昔っから姑息な手を使う奴でさ」

「失礼ねえ。利己的って言ってほしいわあ」

「お二人は荻野さんの息子さんのことは覚えていますか？」

「貴美枝監督の息子は確かにバスケが超上手かったけど、普段は無口で何考えてんのかわかんない奴でさ」

「男子部がいつも嘆いていたよお。荻野聡おぎのさとしのおかげで連敗記録更新だってえ。でも、私もしゃべったことないからあよくわからないわあ。顔ももう覚えてないしい」

「にしても、ジェイムス。何でそんなことまで知ってんだよ？ あ、もしかしてアタシのことが気になって調べたとか？ でも、安心してくれよな。アタシ年下に興味ないんだよな。男はやっぱり包容力のある年上じゃないと」

聞かれてもいないのに、輝は興奮して一人でしゃべりまくっていた。

「梨花子と輝って秀越高校に入学する前からの顔見知りだったの？」

「あれ、言っただけだったか？」

「初耳！」

「言ったことあるぞ！」

「記憶にない！」

「いや、言っただぞ！」

輝は断言した

「だいたい同じ市内の中学校に通ってたんだから、試合で何回か顔を合わせるだろう」

「そうだけど」

みちるは輝たちの住んでいる鳴岳市の隣の西桜市に住んでいる。みちるが通っていた西桜中学校バスケットボール部は県大会ではいつも二回戦敗退する弱小チームで他の中学校との交流も少なかった。おかげで秀越高校にはみちると同じ中学校出身のバスケットボール部員はいない。それは梨花子や輝も同じなのだが。

そんな話をしている間に、荻野夫妻の姿は見えなくなっていた。こちらに気付かなかったのだろうか。それとも気付いていても、息子の墓参りに行く前にみちるたちと話をしたくなかったのかもしれない。会えば、息子のことを説明しなければいけない。なくなる。

「ねえねえ、ジェイムス。もしかしてえ私のことも調べちゃったりしたのお？」

「出身中学校は合宿中に読ませていただいた部員のデータに書いてあったのを記憶してただけですから」

「そうなのお？」

「皆さんのプライベートは何も知りませんので、ご安心ください」

「じゃあ私のことこれからあいっぱい教えてあげるねえ」

梨花子が胸元を両腕で挟んで悩殺お色気ポーズを取る。

「あれ、梨花子さん。何かついてきますよ」

だが、梨花子以上に色気のある女社長を毎日見ているジェイムスは違うことに目がいついていたらしい。

梨花子の胸元に黄色い何かがついていた。梨花子はそれを素早く取り除く。

それを見た輝は嬉々として梨花子に耳打ちする。

「お色気の時代は終わったんだよ」

「でもお、ガサツな女よりはいいと思うんだけどお」

梨花子が嘲笑する。

いつもなら笑ってやり過ぐす輝だったが、今日はその言葉に棘を感じたのか言い返す。

「それってどういう意味だよ？」

「その言葉の通りよお」

「ちよつと梨花子。それは言いすぎじゃない？」

「そうかしらあ？」

「皆さん、それぞれ個性があつて魅力的ですよ」

この時ばかりはジェイムスの言葉がありがたく思えた。

一瞬その場が和んだかのように見えたが、三人の間に妙な不協和音が広がった。こんなことは初めてだった。

みちるたちは無言のまま、竹ノ内の住むマンションに向かった。

8..夏休みの終わりに血の雨が降る(3)

三条の件も踏まえて、今回はジェイムスがインターフォンを押した。出てきたのは中年の女性の声だった。おそらくは竹ノ内の母親だろう。

「私は秀越高校の進路指導を担当している鈴木と言います。竹ノ内くんはご在宅でしょうか？」

ジェイムスの言葉に、みちるは啞然とした。

「鈴木って誰？」

「日本で一番多い苗字ですよ」

みちるの突っ込みに小声で返事をするジェイムス。

いくら居留守を使われる可能性があるからといって、そこまでのウソをつく必要性があるのだろうか。

聖人の顔をしたペテン師とは、ジェイムスみたいな人間のことを言うのだろうか。しかし、ジェイムスはなぜこんなにも協力的なのだろうか。何のメリットもないというのに。

みちるはジェイムスの行動に疑問を感じ始めた。

竹ノ内の母親はジェイムスの言葉を真に受けて、正面玄関のロックを解除してくれた。

みちるたちはエレベーターに乗って、五階に向かう。

五階に到着すると、一番奥の部屋から竹ノ内が飛び出してきた。

「直人、どこに行くの？」

「どこだっていいじゃないか」

母親の止める声を振りきって、竹ノ内はこちらへ駆けてくる。聞いたこともない教師の名に不安になって逃げ出そうとしても不思議ではなかった。

「ジェイムス監督？」

ジェイムスの顔を見た竹ノ内は、安心したような狼狽しているよ

な複雑な表情をしていた。

「もしかして、鈴木ってジェイムス監督のことだったんですか？」

「ウソについて申し訳ありませんでした。でも、どうしても竹ノ内くんに聞きたいことがありますして」

「な、何ですか？」

「これからのバスケ部のことについてです」

みちるはジェイムスの言葉にまたしても啞然とした。

一体どこからそんなウソが生まれてくるのだろうか。

「バスケ部のことですか？」

「はい。青葉さんたちも心配で、竹ノ内くん相談したいと」

「そ、そうなのよ」

みちるは引きつった笑顔を見せる。

「ここでは何かと話しにくいでしょうから、近くの公園にでも行きませんか？」

ジェイムスの申し出に、竹ノ内は黙ってうなずいた。

公園のベンチに腰掛けた竹ノ内はうつむいたまま、体を小刻みに震わせていた。

その横にジェイムスが座り、みちるはその後ろに立っていた。

ここは昨日雨宿りに来た公園だった。みちるはジェイムスの後ろ姿を見て、昨日のことを思い出す。

けっこう着やせして見えるタイプなんだ。

みちるは思わず赤面する。

梨花子と輝はもう一つのベンチに腰掛け、自動販売機で買ったスポーツドリンクを飲んでいる。

その二人の厳しい視線を感じて、みちるは我に戻る。

「あのさ、ジェイムス。聞きたいことがあるんだけど」

みちるは小声で話し掛けた。できれば、輝と梨花子には聞かれたいくない。

「何ですか？」

「梨花子と輝が中学時代から顔見知りだったり、貴美枝監督の息子さんのこと知っていたり、どうしてそんなに詳しいの？」

「みちるさんの力になればと思います」

ジェイムスは微笑むだけで、それ以上は答えてくれなかった。

「本題に入ってよろしいですか？」

「……うん」

みちるはとりあえずうなずいた。

「竹ノ内くん」

ジェイムスに名を呼ばれ、竹ノ内は大仰に体をビクつかせた。

「竹ノ内くんは斉藤くんの父親が経営する会社が倒産して大学に進学すらままならなくなってしまったことを知っていましたか？」

「ボ、ボクは何も知りません！」

竹ノ内は立ち上がり、帰ろうとする。

「そういえばあ、真木キャプテンって昨日は三条くんとどこに出掛けたのかしらあ」

「さあな。でも、あのままずっといっしょにいたんだぜ。だー、三条はともかくアタシもランボルギーニに乗りたいたぜ」

梨花子と輝が関係ない話をしているのが聞こえた。まるでウワサ好きの主婦の色端会議のようだ。

「あのメスブタ……」

竹ノ内が憎らしそうに吐き出した。畏怖の表情から憎悪の表情へと豹変する。

みちるはその言葉が清香のことを言っているのだと直感した。

「あの女のせいで三条くんは……、ボクは三条くんのために人殺しまでしたのに……」

「人殺しって、どういうこと？」

みちるは竹ノ内の呟きを聞いたです。

竹之内は頭を抱えてうつむく。

「あの日の夜、三条くんは真木といっしょに外に出た。それを見た斎藤キャプテンは追いかけて行って三条くんに『清香は渡さない。約束は果たしたんだから早く金を出せ』って詰め寄ったんだ。だけど、三条くんは『そんな約束は知らない。真木に見捨てられたのはお前が女々しいからだ』なんて言っていた。そしたら、斎藤くんが逆上して三条くんの首を絞めようとして、真木はさっさと逃げるし……だから、ボクは三条くんを助けようとして石で斎藤キャプテンの頭を殴ったんだ。斎藤キャプテンは倒れて頭から血をいっぱい流して動かなくなった」

斎藤の後頭部の打痕は竹ノ内がつけたものだった。動機はみちるたちが考えていたものとはまったく違ったが。

竹ノ内は声を震わしながら続けた。

「ボク、三条くんのためにやったのに……、三条くんはボクに責任を取れって言って真木を追いかけていったんだ。でも、ボク怖くなってすぐに逃げ出したんだ。そしたら、斎藤キャプテンがいなくなったって大騒ぎになって、翌朝には首を吊って死んでるし。ボクもうわけがわからなくなって……三条くんに助けを求めに行ったのに、三条くんは真木にすっかり骨抜きにされて……。あの女が悪いんだ。あの女のせいで皆おかしくなっちゃたんだ！あの女のせいでボクは三条くんに捨てられたんだ！ずっと好きだったのに……」

「……………」

みちるは絶句した。

竹ノ内が斎藤を撲殺しようとした事実より、三条を慕っていたという事実に啞然とした。竹ノ内は三条の下僕であることに何よりも喜びを感じていたのである。

さすがの梨花子と輝も竹ノ内から距離を取って離れていく。

「ってことは、やっぱり斎藤キャプテンは自殺じゃなくて殺されたってこと？」

「ですが、竹ノ内くんは斎藤くんの後頭部を殴った後に逃げたと言

ってます。その後に誰かが斎藤くんを絞殺したということになりますか……」

「殺してやる！ あの女さえいなくなれば三条くんはまたボクのことを必要としてくれるんだ！」

竹ノ内は錯乱状態に陥っていた。このままにしておくと、本当に清香を殺しかねない。

「とりあえずボクは竹ノ内くんを幼馴染の刑事にお願いして少年課に保護してもらいます」

「その方がいいみたいね」

常軌を逸した竹ノ内を見て、みちるも思わず距離を取った。下手に止めに入ったりすればこちらが殺されかねない。

「さあ、竹ノ内くん」

「いやだ！ ボクはあの女を殺しに行くんだ！」

叫ぶ竹ノ内に公園にいた人々の視線が集中する。

「あ、すみません！ あたしたち演劇部でして、今舞台の稽古しているんです。気にしないでください」

みちるは引きつった笑顔で釈明する。

「今のうちに」

「青葉さんもお上手ですね」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！」

みちるたちはその場から逃げるように公園を出た。

「離せ！ 殺すんだ、あの女を！」

竹ノ内はジェイムスを振り切ろうと暴れだす。

「仕方ありませんね」

ジェイムスは小さくため息をもらすと、竹ノ内の首の後ろを手刀で叩きつけた。すると、竹ノ内の体は力をなくし倒れこむ。

「何をしたの？」

「乱暴なことはしたくなかったのですが、竹ノ内くんには少しの間気絶してもらいました」

「すげー、ジェイムス。そんなこともできんだ」

距離を取っていた輝は竹ノ内が気絶したとたん、こちらに歩み寄ってくる。

「一応武術の心得はありますので」

「じゃあ私に変なナンパ男にしつこく言い寄られた時は助けてくださいねえ」

梨花子も戻ってくる。

「もう調子いいんだから」

ジェイムスに群がる輝と梨花子を見て、みちるは超特大のため息を吐き出した。

しかし、のんびりしている暇はない。ここは早く三条に会って真相を問いたださなければいけない。

そんな時、みちるの携帯電話が鳴った。着信は貴美枝の携帯電話からだった。

「青葉です」

みちるは電話の向こうから聞こえてくる貴美枝の言葉を聞いて驚愕した。

ただならぬみちるの雰囲気を感じた輝と梨花子が心配そうにこちらを見つめている。

「はい、わかりました」

みちるは電話を切った。

輝と梨花子がみちるの言葉を待っている。

「三条が……死んだって」

8..夏休みの終わりに血の雨が降る(4)

三条が死んだと報告を受けたみちるたちは、貴美枝に呼ばれて秀越高校のバスケットボール部の部室に来ていた。

斎藤の一件がなければ、普段ならここに来てバスケットボールの練習をしているはずだった。

「悪かったわね。せっかく夏休み最後の日だっていうのにこんなことで呼び出したりして」

貴美枝は今朝見た黒系の服装ではなく、いつものトレーニングウェア姿だった。

「いえ。それより三条くんが死んだって……」

「まだ詳しいことはわからないのだけど、飛び降り自殺を図ったのよ」

「飛び降り自殺？」

「秀越高校の第三校舎の屋上から。屋上に靴と遺書が残されていてね。第一発見者の荻野が今警察に行って事情を説明しているはずよ」

「あの他の皆は？」

「全員に連絡はしたのだけど、来たのはあなたたち三人だけよ」

貴美枝はため息をもらす。

斎藤に比べて三条が部員たちの信望を集めていなかったことがよくわかる。

「でもお、真木キャプテンくらい来てもいいのにねえ」

梨花子が小さく呟く。確かに昨日までいっしょにいたのだから、一番に駆けつけてきてもいいくらいだ。しかし、天道の話によると、清香はメリットのない人間とは付き合わないと言っていた。死んでしまった三条にはもう興味がないのかもしれない。

「あなたたち今日はずっといっしょにいたの？」

「はい」

みちるは喜美枝の質問に不自然さを感じた。

「あの、貴美枝監督。一つ質問してもいいですか？」

「何？」

「貴美枝監督の息子さんをひき逃げしたのって……」

みちるの質問に、貴美枝の表情が強張っていくのがわかった。

「バカ、青葉！ 何言ってるんだよ！」

輝が慌てて止めに入るが、みちるは続けた。

「もしかして三条くんじゃないですか？」

「よせて！」

みちるは貴美枝の返事を待った。

「……そうよ」

貴美枝は短く答えた。

「無免許運転のあげくにひき逃げ。犯人はすぐにわかった。けど、三条の父親はそれをもみ消そうとして警察に圧力をかけて、私たちには示談を申し出てきたわ。もちろん、私たちは断った。いくらお金をもらっても聡は返ってはこない。でも、それからだった。三条の父親が私たちの勤める秀越高校に多額の寄付をしてくるようになったのは」

「恨んでいますか、三条くんのこと？」

「おい、青葉！ お前さっきから変だぞ。自分の息子を殺されて恨まないわけねえだろう！」

「いいのよ、神宮寺。確かに恨んでないと言ったらウソね。三条が秀越高校バスケット部に入部した時は特に」

貴美枝の気持ちは当然だろう。愛する息子からバスケットボールを奪い、死に追いやった三条が何食わぬ顔でバスケットボールをやっている姿など見ていられなかっただろう。ましてやバスケットボールが好きという理由で入部していいことを知っていたのだから。「でも、さっき三条の遺体を見た時、涙が止まらなかった。また私と同じ思いをする母親を見なければいけないのかって」

「貴美枝監督……」

みちるは胸が締めつけられた。もし自分が貴美枝の立場だったら、そんな風に他人の心配ができただろうか。自分なら真っ先に三条の死を喜んでしまうかもしれない。

みちるはそんな自分の心の狭さを非難した。

「貴美枝監督は心が広いわねえ」

「アタシだったら自殺したぐらいじゃ絶対に許さないけどな」

梨花子も輝もみちると同じ考えなのだろう。

あの気持ちは母親にならなければ理解できないものなのかもしれない。

「遅くなりました」

竹ノ内を警察に連れて行ったジェイムスが部室に入ってくる。

「ボンドさん？」

「はい。ボクも三条くんの訃報を聞いて駆けつけてきました」

「でも、誰が？」

「あ、あたしです。ジェイムス監督にも三条くんのことを伝えておいた方がいいと思って」

みちるは貴美枝にはジェイムスと行動を共にしていることは伏せておきたかった。

「そうなの。お忙しいのにわざわざすみません」

「いえ。十日足らずでしたが、三条くんもボクにとっては大切な教え子ですから」

ジェイムスはこんな時でも笑みを絶やさなかった。

「あの、三条くんの遺体があった場所に行ってもいいですか？」

みちるはこれ以上いたらボロが出てしまいそうなので、早急に出る場から立ち去りたかった。

「もう警察も帰っているから大丈夫だとは思いますが、興味本位で見に行くなら止めなさい」

「いえ、お花を供えようかと思って」

「そうしてあげてくれる？」

「はい」

みちるたちは部屋を出た。

8..夏休みの終わりに血の雨が降る(5)

みちるは三条の遺体があった場所に花を供えた。

コンクリートの地面には三条の飛び散った鮮血の跡が生々しく残っていた。

「アタシ、今日の晩飯食えるかな？」

輝が顔面蒼白にして呟いた。

「私は食べれるわよお」

「さすがオカルトオタクは言うことが違うな」

「失礼ねえ。外車オタクよりはマシだわあ」

「緒方といっしょにするなよな」

「みちるはあ」

「青葉は」

抗弁していた梨花子と輝はみちるを見て、

「どっちがいい？」

異口同音で聞いてくる。

「どっちもやだ」

みちるは適当に答えて第三校舎の屋上を見上げた。三条はおそらくあそこから飛び降りたのだろう。

「一生懸命になれるものがあるのは良いことだと思いますよ」

ジェイムスがフォローに入っていた。

みちるは無視して、第三校舎の中に入っていくようにする。

「おい、青葉。まさか屋上に行くつもりか？」

気付いた輝が引きつった表情で聞いてくる。

「お前物好きだな。どうしてそこまですんだよ?」

「わからない」

みちるは返答に困った。

「ただ疑問に思ったことはちゃんと調べておかないと、気持ちが悪
いから」

「それだけえ？」

梨花子があきれた顔をしていた。

「輝たちはもう帰っていいから」

「そうはいくかよ。ここまできたら付き合うぜ！」

「そうそう。私たちい、親友だもんねえ」

輝と梨花子が顔を合わせて微笑んだ。

「輝……、梨花子……」

みちるは胸がじーんと熱くなった。

「さあジェームス行きましょお」

「屋上へ通じる階段に案内するぜ」

梨花子と輝はジェームスの手を引っ張って先に行く。

「……信じたあたしがバカだった」

みちるは儚い友情に嘆息した。

屋上には落下防止の金網のフェンスが備え付けられていた。

三条はこのフェンスを乗り越えて飛び降りたことになる。

「よくこんな所から飛び降りたよな」

輝はフェンス越しに下を見ながら、ぶるぶると身を震わせた。

「？」

みちるは足元にある黄色い何かに気が付いた。

手に取ってみると、それは花弁だった。

みちるは今朝貴美枝が花屋で買った花束の中に黄色い菊があった
のを思い出した。

「どうかしてのお、みちる？」

「ううん、何でもない」

梨花子に問われて、みちるはその場を誤魔化した。

「で、当然幼馴染の刑事さんから何かの情報を得てきたんでしょ？」

みちるは話題をジェイムスに振った。

「見ますか？ 三条くんの遺書のコピーを」

ジェイムスはズボンのポケットから折りたたんでいた紙片を取り出す。

みちるはそれを受け取ると、広げる。

輝と梨花子が覗き込んでくる。

遺書は斎藤と同様にワープロ打ちで書かれたものだった。

「『オレは親睦会の夜に斎藤を殺してしまった。でも、それはチャンスだと思った。斎藤を自殺に見せかけて、父さんの裏でやっている不正を公表したかった。オレは実力で秀越高校に入りたかったのに。しかし、父さんは斎藤の遺書をもみ消した。三年前にオレが起こしたひき逃げ事件の時のように。オレは良心の呵責に耐え切れない。もう死んですべてを終わらせるしかない』」

みちるが代表して三条の遺書を掻い摘んで音読した。

「あいつにも良心つてのがあったんだな」

「でもお、これで斎藤キャプテンを殺したのが三条くんだってわかって良かったんじゃない」

輝と梨花子はすべてが解決して安堵している様子だった。

「となりゃ、さっさと帰ろうぜ！ いつまでもこんな所にいたくないし」

「そうよねえ。そういえば、お昼がまだだったわあ」

「どっか食いに行こうぜ！ アタシ、腹減ってきたぜ」

「はあ？ 輝、ご飯は食べれないって言ってたじゃない」
思わずみちるは突っ込む。

「昼飯は食べるんだよ！」

「どこに行くう？」

「アタシ、ハンバーガー食いたい！」

輝も梨花子もまるで何事もなかったように普段通りにはしゃいで

いた。

「はいはい、もう好きにして」

みちるは後ろ髪を引かれる思いで、その場から離れた。

8..夏休みの終わりに血の雨が降る(6)

ファーストフード店で軽く昼食を終えたみちるは、その場で輝と梨花子と別れた。またジェイムスとの仲を疑って後を追いかけてくるかとも思ったが、ジェイムスと携帯電話の番号とメールアドレスを交換したことで安心しきったのか、輝と梨花子は素直に家路に着いた。

みちるはそれを確認すると、再び秀越高校の第三校舎の屋上に向かった。

屋上に通じる扉を開ける。

みちるは先客がいたことに驚く。

「どうして、ここに？」

「みちるさんならまたここに帰ってくると思いましたから」
ジェイムスは破顔で答えた。

「それに、ボクにまだ何か聞きたいことがあるのではないかと思いますので」

「まあね」

みちるは苦笑すると、フェンスにもたれて空を仰いだ。雲一つない青空だというのに、みちるの心には大きな暗雲が広がっていた。三条の遺書から想定すると、三条はひき逃げしたことを後悔していたことになる。しかし、そんな人間がまた無免許で車を乗り回したりするだろうか。普通なら二度と車に乗りたくないと思うはずだ。そして、なぜ三条は飛び降りる場所に学校の屋上を選んだのか。

みちるはミニスカートのポケットの中に手を入れると、黄色い花弁を出す。あの時、とっさにポケットの中にしまい込んでしまっていた。

「それ、ひまわりじゃないですか？」

「ひまわり？ 菊じゃないの？」

みちるは花に詳しくなかった。今朝、墓参りに行く喜美枝の花を見たことで菊だと思い込んでいた。

「たぶんひまわりでしょう。菊ではないことは確かです」

「そうなんだ。何でも知ってるんだね、ジェイムスは」

みちるの気持ちはどんどん落ち込んでいくばかりだった。

「三条くんの死亡推定時刻がわかりました。今朝の八時前後だそうです」

「八時？ そんな人目につきやすい時間帯に自殺したっていうのに、荻野監督が見つけたのって十一時過ぎだったって」

「はい。それが荻野さんの話によると校門に『本日は外壁塗装のため立ち入り禁止』と書かれた貼り紙があったらしくて、クラブ活動の生徒たちも来ていなかったそうです。でも、不審に思った荻野さんが校長に電話で確認したところ何も知らないとおっしゃって、貼り紙を取って中に入ったそうです」

「誰かのいたずらにしては、タイミングが良すぎるわよね。三条が自分で貼ったとは思えないし」

誰かが三条を呼び出して、ここから落としたとしか思えなかった。しかし、この高さのフェンスをどうやって。

「今回は不審な傷跡とかなかったの？」

「それが頭部の損傷が激しくて、詳しい検死の結果はまだ出ていないそうです」

例え気絶させたとしても一人で三条を担いで落とすのは難しい。

考えれば考えるほど、悪い方向へと答えがまとまっていく。

みちるはその場に座り込んだ。その横にジェイムスも座る。

「みちるさん、少しボクの昔話をしていますか？」

「今はそんな気分じゃ」

言いかけて、みちるはハッと気付いた。ジェイムスはみちるのことを『青葉さん』ではなく、『みちるさん』と名前で呼んでいる。いつからだったのだろう。そんなことにも気付かないほど、自分は

冷静さを失っていたのだ。

みちるは初心に戻ろうと心掛けた。

「うん、話して」

「お恥ずかしい話ですが、ボクは中学の頃まで手がつけられない札付きの悪だったのですよ」

「ウソ……？」

「本当ですよ」

今の爽快感あふれるジェイムスから、ヤンキー姿のジェイムスは想像できなかった。

「暴走族に入ってバイクを乗り回してケンカ三昧の毎日を送って警察に補導されては、よく母を泣かせていました。あの頃のボクは母を憎んでいましたから」

「憎んでいた？」

「この名前のおかげで幼い頃からいじめられてきましたからね」

ジェイムスは微苦笑した。やはり気にしていたようである。

「高校に入って、ある人に言われました。親がちゃんと付けてくれた名前で呼んでくれることがどんなに幸せかわからないのか、って母親を泣かせる人間は最低のクズ野郎だ、とも。ボクはその時にはその人が言っている言葉の意味が理解できませんでした。でも、母がボクの名前を呼ぶことができなくなった時、初めて気付いたのです。母親の愛情の偉大さに」

ジェイムスはふと寂しい表情を見せた。こんな顔のジェイムスを見るのは初めてだった。いつも笑ってばかりで、そういう感情とは無縁の人間だとばかり思っていた。

おそらくジェイムスの母親はもうこの世には存在していないのだろう。失って初めて思い知らされる。大切な人の存在を。

みちるは掛ける言葉が見つからなかった。

「その人のおかげでボクは立ち直ることができました。ですから、ボクはその人の役に立つことがしたいと思ったのです」

「もしかして、その人って……あの女社長さん？」

「はい。ちなみにボクの幼馴染の刑事も社長のおかげで立派に更生できたのですよ」

「ふーん」

人は見かけで判断してはいけないのだと、みちるは痛感した。

琳子は人の迷惑顧みず我が道を進んでいくタイプに見えたが、情に厚い優しい心を持った女性のものである。

「あ、あの、ジェイムス。今度はあたしの話を聞いてもらっていい？」

「もちろんです」

ジェイムスはいつもの爽やか笑顔を向けてくれた。

「その人のことを本当に大切に思っているなら……」

みちるは躊躇した。

自分の考えは間違っていないだろうか。間違えていれば、相手を傷付けてしまう。もう以前のように接してはくれないかもしれない。しかし、みちるは決意した。

「過ちはちゃんと正さなければいけないよね」

「そうですね」

「だから、その前に確認しておきたいことがあるの」

みちるは自分の考えをすべてジェイムスに打ち明けた。

9..告白は夕焼けの下で(1)

みちるは萩野聡の墓参りに来ていた。墓には貴美枝が供えた菊の花以外に、ひまわりの花も供えられていた。

聡とは会ったことはなかったが、みちるは勇気を分けてもらおうとして手を合わせた。

「おい、青葉。アタシたちをこんな所に連れてきてどういづつもりだよ？」

「そうよお。だいたいお墓参りっていうのは午前中に来るものなんだからあ」

輝と梨花子は急な呼び出しに憤慨している様子だった。

「あたしね、あれから輝と梨花子と同じ中学校のバスケット部だった子に会いに行ってきたんだ」

みちるは聡の墓と向き合ったままの形で話をする。

「何だよ、それ？」

「どうしたのお、みちる。変だよお？」

「あたしたち、親友だよね」

みちるは立ち上がると、輝と梨花子に向き直る。

「今朝、貴美枝監督たちが買っていた花は菊だけだった。けど、ひまわりの花が供えられている。たぶん、貴美枝監督たちの他に誰かがお墓参りに来たんだと思う」

「そりゃ命日だからだろう」

輝が答える。

「どうして今日が命日だって思ったの？」

「だ、だって墓参りするって言ったら、盆や彼岸の他には命日くらいだろう」

みちるはミニスカートのポケットからひまわりの花卉を取り出し

た。

「この花卉、学校の屋上に落ちてたの」

「みちるう、回りくどい言い方はやめてえハッキリと言ったらあ？
その花卉が私についていたのを見てたんでしょお？」

梨花子にはみちるが言おうとしていることがわかってるのだから。
う。

みちるも覚悟を決めた。

「斉藤キャプテンと三条を殺したのって……」

みちるは一瞬の躊躇の後、梨花子を見つめた。

「梨花子なんでしょう？」

「な、何バカなこと言ってんだよ、青葉！ 緒方に人殺しなんてできるわけねえだろう！ だいたい緒方には二人を殺す理由がないじゃないか」

「梨花子、聡くんと付き合っていたんでしょ？ 第一中学校の七不思議だってウワサになっていたらしいじゃない。鬼キャプテンが第二中学校のルーキーと付き合っているって。輝も知ってはすだよ」

「ああ、知ってたさ。でも、今はそんなこと関係ないだろう！ アタシも緒方もあいつのことは忘れたんだよ！」

「もういいわ、輝」

梨花子はあきらめにも似た吐息をもらす。口調がいつもの間延びした口調ではなかった。

「ずるいよね、みちるも。聡の墓の前でそんなこと聞くなんて……
ウソなんかつかないじゃない。そのひまわりの花はね、今朝私と輝が供えたのよ。聡が大好きな花だったから」

「梨花子……」

「そうよ。私はあの二人を殺したの」

梨花子は泰然な態度で答えた。

「三条を殺したのは、やっぱり聡くんの復讐？」

「聡はね、事故のせいで半身不随になって一生バスケットができない体になったの。わかる？ 大好きなバスケットができなくなった聡の気持ち

ちが？」

「……………」

みちるには答えることができなかった。

「もういいよ！ 緒方、それ以上しゃべるなよ！」

輝が止めようとしたが、梨花子は絞り出すように続けた。

「聡は毎日泣いていた。そして……動かない体を引きずって病院の窓から飛び降り自殺を図ったのよ。私、気が狂いそうだった。聡のいない人生なんて考えられなかった。私も聡の後を追うしかないって思った。だけど、輝や貴美枝監督に励まされて……聡の分までバスケを頑張ろうって決めたの。それなのに、三条が秀越高校のバスケット部に入学してきた。三条の奴、反省した様子が全然なくて……私たちのことすら覚えていなかった。だから悔しくて殺してやろうって何度思ったことか」

梨花子は今までの思いを吐露した。

「でも、斉藤キャプテンは関係なかったんじゃないの？」

「斉藤キャプテンも誠実そうな顔をした悪魔よ。三条と同じ穴もムジナだった」

確かに斉藤のイメージは竹之内から真相を聞いて覆させられている。

「あの日の夜。私は三条を殺すきっかけを狙っていたの。だから、何とかして三条を二人きりになるチャンスを作ろうとしていたんだけど」

梨花子が三条にアプローチしていたのにはそういう思惑があったのだと、みちるは知った。

「みちるも知っての通り、真木キャプテンに邪魔されちゃったけどね。でも、私は待った。そして、三条が真木キャプテンと体育館を出て行った時、チャンスだと思ったの」

「それでテーピングをほどいてあたしに気付かせたの？」

梨花子はうなずいた。

「私はすぐに三条を追った。そこからは竹ノ内くんが話していた通

りよ。だけど、斉藤キャプテンは気を失っていただけですぐに起きたわ。その時、私の中でも悪魔が目覚めたのよ。斉藤キャプテンを使って三条の数々の不正を暴露して今の地位からあいつを引きずり落としてやろうって」

「テーピングで斉藤キャプテンの首を絞めたの？」

「そうよ。頭を殴られてフラフラしている斉藤キャプテンの背後からそっと近付いてテーピングで首を絞めたの。遺書は三条を自殺に見せかけるに準備していたものがあったけど、ロープとかを取りに行ったりしていたら遅くなってみちるたちに不審に思われるから私は一度戻ることにしたの。まさか戻ってくるところを貴美枝監督と輝に見られているとは思わなかったけどね」

「それでアリバイ作りに協力してもらったわけ？」

「違う！ 貴美枝監督は反対したんだ！ だけど、アタシが貴美枝監督に頼んで勝手にやったんだ！ 緒方は何も頼んでねえよ！」

輝は泣いていた。

「どこがアリバイ作りだって思ったの？」

「貴美枝監督が斉藤キャプテンを呼びに来た時に、梨花子が斉藤キャプテンとすれ違ったって言ったよね。あの時、二十三時を過ぎていた。それと、女子寮の二階から輝が外に人影を見たって言った時に、梨花子は斉藤キャプテンの名前を口にした。おかげであたしは斉藤キャプテンが生きていると錯覚させられた。そうすることでアリバイを作り、斉藤キャプテンは自殺したと判断させようとした」

「嫌な予感がしていたの。みちるが斉藤キャプテンのこと調べているのを知った時。しかも、ジェイムスのおかげで死亡推定時刻がバレちゃうし。まさかあの臨時監督がそこまで調べてくるなんて思いもしなかった」

梨花子にとってジェイムスの存在はイレギュラーだったのだろう。そして、みちるが真相を追究することも。

「あげくに遺書はもみ消されて、三条を蹴落とすどころか、私の方が追い込まれるなんて」

梨花子は苦笑した。

「だから、焦って三条を殺したの？」

「焦ってなんかじゃないわ。聡の命日に三条を殺すことが、聡へのせめてもの手向けだと思ったからよ」

「本当にそう思っているの？」

「思ってるさ！ 何で聡が死んであいつがのうのと生きてんだよ？ 不公平じゃないか！」

そう叫んだのは輝だった。

「だから、三条を脅迫して学校に呼び出したんだ。あいつ、梨花子一人だと思い込んでなめてやがったから後ろからあいつの頭をバツドでぶん殴ってやって気絶している間に、屋上から落としてやったんだ！」

「違うよ、輝。三条も私一人でやったことよ。もっとも三条の場合、自殺でも他殺でもどっちに思われても良かったんだけどね」

「何言ってるんだよ？ お前が一人で罪をかぶることねえだろう！」

「ごめんね、輝。私、輝が聡のこと好きなの知っていたの。輝の気持ち知っていて、私の復讐に利用してたの」

「そんなのアタシは気にしねえよ！ 利用できるもんは何だって利用すりゃいいんだよ！」

「ありがとう、輝。私が今までバスケを続けてこられたのは、輝と貴美枝監督のおかげだよ」

すべてを吐露した梨花子の表情は柔和だった。

みちるは胸騒ぎを感じた。

すべての復讐が終わった時、復讐者は次に何を求めるだろうか。

「私ね、みちるのことが嫌いだったの」

「梨花子……」

「でも、それは大好きなバスケを一生懸命にやってるみちるが妬ましかっただけなのかもしれない」

梨花子は持っていたショルダーバックからナイフを取り出した。みちるに呼び出された時点でこうなることを予想していたのかもしれない。

れない。

梨花子は輝を一瞥する。

「すべては私の罪よ。いいわね、輝」

梨花子は目を閉じると、自分の胸目掛けてナイフを振り下ろした。

「緒方！」

「梨花子！」

輝とみちるも止めようと手を伸ばす。しかし、間に合わない。

9..告白は夕焼けの下で(2)

「っ?」

梨花子が閉じていた目を開いて驚愕している。それは輝も同様だった。

梨花子の胸とナイフの間に、ジェイムスの二の腕があった。ナイフはジェイムスの二の腕に浅くだが突き刺さっている。

「緒方!」

萎えていく梨花子を輝が支える。

「ギリギリセーフでしたね」

「セーフじゃないわよ! ナイフが刺さってるじゃない!」

「これくらい昔は日常茶飯事でしたから」

こんな時でもジェイムスは破顔で、ためらうことなく突き刺さったナイフを抜き取る。傷口から鮮血があふるれてくる。

「もう来ないのかと思って心配したんだから!」

みちるはハンカチを取り出すと、ジェイムスの二の腕を縛って止血する。

「一人で大丈夫って言ったのは、みちるさんではありませんか」

「それはそうだけど」

みちるは口ごもった。ジェイムスならきつと来てくれると信じていたなどとは、口が裂けても言えないセリフだった。

「梨花ちゃん!」

貴美枝が梨花子のもとに駆け寄る。おそらくジェイムスが連れてきてくれたのだろう。

「ごめんなさい。あなたたちをこんなに追い詰めてしまったのは私のせいだわ。あなたたちを秀越高校に誘わなければ三条に会うこともなかったのに。あなたの復讐を止めることができなかったのは私の罪だわ。いっしょに償いましょう。でも、生きてちょうだい。聡のためにも。もう大切な子供たちを失いたくはないのよ」

「貴美枝監督……」

梨花子は嗚咽した。そんな梨花子を輝はきつく抱きしめた。二人の間にみちるが入る余地はなかった。親友だと思っていたのは、みちるだけだったのかもしれない。二人の辛い気持ちに気付いてあげられなかった自分の甘さを呪った。

梨花子と輝は自首するため、貴美枝といっしょに警察に向かった。みちるは掛ける言葉が見つからず、無言で三人を見送った。涙が止まらなかった。視界がぼやけて何も見えなくなる。

みちるはこうして大切な親友を二人失った。

「やっぱ雨の日はロクなことないなあ」

「これで雨を拭きますか？」

ジェイムスがハンカチを差し出してきた。

みちるは素直にハンカチを借りた。

「あたしがやったことって間違っていたのかな？」

「そんなことはありませんよ。梨花子さんはどちらにせよ聡くんの後を追うつもりだったのでしょうから、みちるさんのおかげで彼女の命は救われたわけです」

「そうなのかな？」

「大丈夫ですよ。待っていれば梨花子さんも輝さんもみちるさんの所に必ず戻ってきてくれますよ」

「……うん」

みちるは生返事をする。

「自分に自信を持ってください。あなたは友達を暗闇から光ある世界に連れだしてあげたのですから」

ジェイムスに言われると、そう思えてくるから不思議である。

みちるは梨花子と輝を信じて待つことにした。

「あ、それより早く病院に行かないと！」

「こんなのかすり傷ですよ」

「こんなに血が出ているのに？」

「舐めたらすぐ治りますよ」

ジェイムスは腕を軽く振り回した。

さすが昔不良少年をやっていた人間は言うことが違くと、みちるは痛感した。

「あのさ、今度ジェイムスのお母さんの墓参りにも行っていいかな？」

「誰のですか？」

「だからジェイムスのお母さんだって」

「ボクの母は未だ健在ですが……」

「え？　だって屋上で話していた時、お母さんは名前を呼ぶことができなくなっただって言っていたじゃない」

「誰も死んだとは言っていないよ。母は風邪で喉を痛めてしゃべることができなくなっただけですよ」

「……………」

みちるは絶句した。だが、確かにジェイムスは死んだとは一言も言っていない。みちるの早合点だ。

「そういえば、不良少年時代に暴走族に入ってバイクを乗り回してたって言っていたけど、酔うんじゃないの？」

「そんなこと言いましたか？」

「言ったわよ！　ちよつと今まで言ってきたことってどこまでが真実でどこまでがウソなのよ？」

「さあ、どこまででしょうね」

ジェイムスは爽やか笑顔ではぐらかす。

「もうジェイムスの言うことなんて絶対に信じないんだから！」

みちるは頬を膨らませた。

夕焼けが二人の顔をいつまでもオレンジ色に照らしていた。

10：雨女＋雨男Ⅱ恋の始まり？

「どうして雨なわけ？」

みちるはタバコ屋の狭い軒下で雨宿りしながら、恨めしそうにグレーの空を見上げた。

「今日は雨が降るなんて言っていなかったのに」

今朝は天気予報をしっかりとチェックして学校に向かったみちるだったが、クラブ活動を終え、帰りのバスの中で雨に遭遇した。

「また傘を忘れたのですか？」

傘を差したスーツ姿のジェイムスが雨にも負けない清々しい笑顔でやってくる。

「また、って人聞きが悪いわね。天気予報が外れたのが悪いんじゃない」

優越感に浸っているジェイムスにみちるはぼうと頬をふくらませる。

ジェイムスと会うのは一週間ぶりだった。

どこでかぎつけてきたのか、有名私立高校のスキヤンダルにマスコミが押しつけてきたおかげで、部員が激減し、秀越高校バスケットボール部は廃部の危機にまで追い込まれていた。混乱したバスケットボール部をまとめるのは大変だった。みちるは貴美枝といっしょにバスケットボール部の再建に努めた。そのかいあって廃部の危機だけは免れたが、以前のような活気が戻ってくるのはまだまだ先だろう。しかし、梨花子や輝が帰ってくる頃までには昔のような最強のバスケットボール部を復活させたいと、みちるは思った。

「だいたいあたしをここに呼び出したのはそっちなんですからね。ジェイムスってば、雨男なんじゃないの？」

「よく言われます。でも、みちるさんではないですか？」

「あたしは言われたことはありません！」

ジェイムスは傘を閉じて、軒下に入ってくる。

ジェイムスから電話があったのは昨夜のことだった。クラブが終わってからでかまわないので、初めて出会ったタバコ屋の軒下で待っていてほしいと言ってきたのだ。

みちるは文句を言いながらも、ジェイムスとの再会で荒んだ心が癒されていくのを感じた。

「それで、話って何？」

「単刀直入に言わせていただきます」

「はい、どうぞ」

「あなたがほしいです」

「えっ？」

みちるの心拍数が一気に上昇した。

「ほしい、って？」

「その言葉の通りです」

「そ、そんなこと言って……もう騙されないんだから！」

「ボクは本気ですよ」

いつになく真摯の眼差しで見つめてくるジェイムスに、みちるはときめく心を抑えきれずにいた。

「そ、そんなこと急に言われても、心の準備が……。ほら、あたしまだ高校生だし。やっぱりちゃんと順序を踏まないと」

みちるの頭は真っ白になっていた。

「そうですか。では、今日の話はなかったということ……また日を改めて」

ジェイムスがあっさりと引き下がる。

「あ、いやその……別に嫌ってわけじゃなくて」

「では、OKと置いていいのですね？」

みちるは頬を紅潮させ、小さくうなずいた。

「でも、やっぱり時期が時期だし……今はそんなにデートもできな

いと思うし……」

「社長、みちるさんからOKの返事をいただきました」

ジェイムスは琳子に電話をそう告げると、すぐに切った。

「へ？」

みちるが呆然としていると。

「実は今度社長が探偵業をやりたいと言い出しまして、優秀な人材を探していたのです」

みちるは状況を把握しようと努める。

「みちるさんのことを社長にお話したら、ぜひみちるさんをほしいと望まれました」

「じゃあ何？ あたしのことがほしいのはジェイムスではなくて」

「はい。社長です」

「……………」

みちるは全身が萎えていくのを感じた。そして、次第に怒りが沸々とこみ上げてくる。

「返せ……」

「はい？」

「あたしのときめき心返せ！ このペテン師！」

「そう言われましても、もう社長には返事を伝えてしまいましたし」

「冗談じゃないわよ！ あたしはキャプテンなのよ！ これからバスケ部再建のためにがんばらなきゃいけないのに、そんな暇あるわけないでしょ！」

「あの人を敵に回さない方がいいですよ。長生きしたいのならば」

ジェイムスが怖いことを爽やか笑顔に乗せてさらりと言ってくる。

「もう嫌だーっ！」

みちるの叫びは激しい雨音にかき消されていった。

終わり

10：雨女＋雨男Ⅱ恋の始まり？（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。

一言でも感想をいただけたら嬉しいです。よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5413e/>

雨音は殺人の前奏曲

2010年10月8日14時46分発行